

文学に表れた平泉文化の基礎的研究（その2）

—近世紀行文等に記された平泉・衣川等—

相原 康 二*

今回は、近世の紀行文・旅日記等に記された奥州藤原氏、及び衣川・安倍氏・源義経に関連する記述を拾い、当時の人々の歴史認識・知識を見ることとした。結論を先に述べると、それらは概ね、先行した史書、軍記物語、或いは幸若舞・奥浄瑠璃等の文学作品から大きな影響を受けていたと思われる。

また、各地の歌枕・名所旧跡については『奥羽観蹟聞老志』（1719）ほか、仙台藩が編纂させた地誌類に影響された所が大であったと思われる。以下に管見に触れた紀行文を年代順に示す（岩手に係る紀行文の概観については、太田孝太郎「紀行文解題」『奥羽史談 第5巻 第2號』1954発行所収参照の事）。なお、物語・奥浄瑠璃・地誌類については、別稿で整理する予定である。

一 『盛岡紀行』 下村左助由章

寛文六年（1666）五月、京極丹後守高国が江戸から南部盛岡に配流されるに当たり、これに随った家臣十人の中の一人、下村左助由章がその見聞を簡単に記録したもの（『南部叢書（六）』1971 南部叢書刊行会編 歴史図書社発行より）。

「〔前略〕やうく行て藤田の里（福島県伊達郡国見町藤田）をもち過ぬ。いにしへ藤原泰衡が住ける、錦戸といふは是なり。人のしめすを聞て、鎌倉の

主頼朝卿泰衡をはかりて、衣川の館を責、義経を討しめ、其後終に此所にして泰衡を亡ほし給ぬ。かかる先見なき泰衡がおろかさおもひやられて、

衣川攻撃暫雖勝 錦戸行軍忽敗亡 可笑泰衡無遠慮 不知攻撃値身殃
〔統けて、靈山に拠った北畠顕家の記述があるが、省略した〕

此所（福島県伊達郡）よりいくばくの地をへて、左の岳に佐藤庄司が館といひて一つの山をさす（福島市飯坂の大鳥城）。彼のふたりの子次（継）信・忠信と言しおの子、義経に随ひて軍におもむきしに、檀浦・芳野の忠節をなせし事、世に傳へもてらしをみにして猶おもひ出されて、

佐藤館下有雙生 一日扶君翼羽生 八嶋先登芳野後 此來猶憶二忠名

それより良（や）行て、道の邊にちひさき堂あり、其内に武具をおひた
るおふな（姫）ふたりならべり。是なん彼次信・忠信が妻の像と言ひ（宮城
県白石市齋川田村神社境内の甲冑堂。かつて義経頼朝におそはれて、かりにう
ばそく（優婆塞）の身となり、みちのくの國へ忍ばせ玉ひける時、兄弟が
母彼の妻と孫をたつさへて、此所に攝待をすへ、君をしたひ子をおもひ夫
を思ひしむかし語を聞て、馬をとめて暫立より侍りぬ。

老尼壯妾又了童 東路留君喜且仲 五百年前親戚會 一時記得小堂中

(中略)

一の關を過ぎて道路の左りに高館山有り。是なんそのかみ衣川の館といへり。源の頼朝(義)・同義家父子みことのりをうけたまはりて、安倍の一族を討んため、此國にくだり、はしめおはり十とせ餘り二とせの春秋のまに、或時は鳥の海を責、衣河を圍ひ、又或は厨川を渡り、金澤をこへ、西より東より北南に及ぶまで、戦ひかたずといふ事なしとある所にして、飛鷹の行をみだるを見て、その所に隠れたるものゝふのある事をかしこくもさとりて終に其なんをのがれし古への事どもをおもひ出して、

源師東征去 戦忠十二年 官兵翔鳥海 夷賊漂衣川
阿部遂亡族 將軍忽執權 縁何知伏士 行鷹亂無全

文治の頃源九郎義經、鎌倉どのゝ心に違ひて、此に微行(びこう)せしを、泰衡をして終に討しめたまふ事、義經利を奪ふの不義より出るなど里人の口までつぶやきあへるを聞て、

弟兄本友干 何事愛情枯 犯上義經罪 永鳴高館郭

終を能せざる事恨ありといへど、一生の戦功をはかり見るに、古へより元來いまだ義經のごときおほからず。しからば武士の家に生れて、誰か是をしたはざらんや。

軍令執鉞得縦横 轉化無常奇正明 宇治川邊追義仲 赤間關外虜宗盛
逆波浮櫓圍行宅 險路揚鞭屠敵城 功勞就中何處最 能收鏡璽復華京
(後略)

二 『おくのほそ道』 松尾芭蕉

元禄二年(1689)三月〜九月の紀行。元禄十五年(1702)刊。松尾芭蕉は伊賀上野の生まれ、俳諧に高い文芸性を賦与し、蕉風を創始した。その間各地を旅して、多くの名句と紀行文を残した。1644〜94。『おくのほそ道』は歌仙を面影にしているなどの評価があるが、筆者の力量では文学的解釈はなしえないので、ここでは歴史的観点による紹介とする(芭蕉 おくのほそ道 2001 岩波書店発行より)。

① 白川の関―「卯の花をかざしに関の晴着かな 曾良」(註・義経家臣兼房関連である)

② 佐藤庄司が旧跡―「月の輪のわたしを越て、瀬の上と云宿に出づ。佐藤庄司が旧跡は、左の山際一里半計に有。飯塚(福島市飯坂)の里鯖野と聞て尋く行に、丸山と云に尋あたる。是庄司が旧館也。麓に大手の跡など、人の教ゆ(ふ)るにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし、先哀なり。女なれどもかひぐしき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入て茶を乞へば、爰に義経の太刀・弁慶が笈をとめて什物とす。笈も太刀も五月にかざれ昏幟 五月朔日の事也。」

③ 末の松山―「其夜目盲法師の琵琶をならして、奥上(浄)るりと云ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上て、枕ちかうかしましけれど、さすがに辺土の遺風忘れざるものから、殊勝に覚らる。」

④ 塩竈―「神前に古き宝燈有。かねの戸びらの面に、「文治三年和泉三郎奇(寄)進」と有。五百年來の俤、今日の前にうかびて、そゞろに珍し。渠は勇義忠孝の士也。佳命(名)今に至りて、したはずといふ事なし。誠「人能道を勤 義を守べし。名もまた是にしたがふ」と云り。」

⑥ 平泉―「三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀

衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流る、大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな

曾良

兼て耳驚したる二堂開帳す。経堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、藁を覆て風雨を凌。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

三『曾良旅日記』河合曾良

河合曾良は信濃の人、芭蕉の門人、1649〜1710。本書は「おくのほそ道」の旅の随行日記（前掲書より）。

①一 関明神―（簾ノ宿（現福島県白河市）ノハツレニ庄司モドシト云テ、畑ノ中桜木有。判官ヲ送リテ、是ヨリモドリシ酒盛ノ跡也。土中古土器有。寄（奇）妙二拝。）

②一 瀬ノ上（同福島市）ヨリ佐場野へ行。佐藤庄司ノ寺有。寺ノ門へ不入。西ノ方へ行。堂有。堂ノ後ノ方ニ庄司夫婦ノ石塔有。堂ノ北ノワキニ兄弟ノ石塔有。ソノワキニ兄弟ノハタザホヲサシタレバはた出シト云竹有。毎年、式本ツ、同ジ様ニ生ズ。寺ニハ判官殿笈・弁慶書シ経ナド有由。系図モ有由。福島ヨリ式里。こほり（桑折、同伊達郡桑折町）ヨリモ式里。瀬

ノウエヨリ壱リ半也。

③一 三日 一 桑折とかいた（貝田、同伊達郡国見町）の間ニ伊達ノ大木戸ノ場所所有（国見峠ト云山有）

④一 十三日 天氣明。巳ノ尅ヨリ平泉へ赴。一リ、山ノ目。壱リ半、平泉へ以上式里半ト云ドモ式リニ近シ（伊沢八幡壱リ余リ奥也）。高館・衣川・衣ノ関・中尊寺（別当案内）光堂（金色堂）・泉城・さくら（桜）川・さくら（桜）山・秀平（衡）やしき等ヲ見ル。泉城ヨリ西霧山見ゆルト云ドモ見ヘズ。タツコクガ岩ヤヘ不行。三十町有由。月山・白山ヲ見ル。経堂ハ別当留主（守）ニテ不開。金雞山見ル。シミン堂、无量劫（光）院跡見。申ノ上尅帰ル。」

四『曾良本 おくのほそ道』の光堂の部分（村松友次『曾良本』おくのほそ道の研究）昭和63年笠間書院発行より）。

「（前略）兼て、耳驚したる、二堂開帳ス。経堂ハ、三將の像を残し、光堂ハ、三代の棺を納メ、三尊の仏を安置ス。七宝散りうせて、玉の扉、風にやぶれ、金の柱、霜雪に、朽て、既、頽廃空虚の草村と、なるべきを、四面、新に囲て、藁を覆て風雨を凌ぎ、暫時、千歳の記念とは、なれり。」

五月雨の降残してや光堂

五月雨や年 くら降て五百たひ（墨滅）

螢火の晝は消つゝ柱かな（墨滅）

五『奥游日録』中山高陽

江戸で活躍した文人の中山高陽が、安永元年（1772）二月末の大火で

類焼の難にあつた機会に、松島・象潟探勝の目的で奥羽旅行した時の記録
〔日本庶民生活史料集成 第三巻 探検・紀行・地誌 東国篇〕 1969 三一書房
発行より。

〔四月〕廿日（前略）それより五十邊（福島県福島市）を過、川有。モトヲチ
を過れば、左の山は佐藤庄司の館のあと也。右に信夫山あり。この山の麓
に文字摺石ありと云（中略）

廿一日（前略）（伊達郡国見町藤田を過ぎ）それより義経こしかけ松、弁慶硯石
など云へる（中略）伊達大木戸の山（中略）左に大なる圓山ありて二重堀と
云へる有（中略）（小須郷（越河）を過ぎ）上の方佐藤祠（次）信の祠あり（佐
藤兄弟の室、尼になりてこの町に終れりと云。佐藤兄弟の所出も飯坂（福
島市）也と云へり）（中略）金方瀬（宮城県柴田郡大河原町）に至る。町の左に

大高宮と云有。この奥に照井太郎の死所ありとぞ（中略）

廿六日（前略）それより鹽竈の明神へ詣づ。石壇二丁計り、二壇に上る。
華表には「正一位鹽竈大明神」と楷書、金字古雅也、道風・佐理などの字
様也。門には「正一位鹽竈社」と有。右に有社、鹽竈明神なる由、正面は
左宮、右宮とならべて額二つ有。鹿嶋・香取の神也と云（原頭註―壇上の
右二泉三郎の金燈籠ト云有。古物也）（中略）

廿七日（前略）名取川の熊野堂神宮寺に辨慶の書有（中略）この書は高館に
送たることなるべし（中略）

五月三日 朝食後、寺崎生より僕一人を差す。これを導引とす。根岸町（岩
手県一関市）を過、田間に入。カツラ石と云大石（中略）姫ノ瀧（中略）達谷窟・
額は「眞鏡山」（中略）赤頭の齒・蛇牙・辨財天堂・ガマ池・九葉楓・手掛松・
岩大佛・不動堂（中略）それを過、毛コシと云へる所あり。古の毛越寺の
舊跡也。これは平泉村也。ふるき礎のみ残。庭と覺ゆる所、大なる池あり。

池中の立石、池畔の置石、皆奇石、今に残れり。小溝の石と見ゆる、長く
つき並べたる石も田畔にあり。この所圓隆寺・嘉禪（祥）寺などの跡也。

南大門など云へる所もあり。又摩多羅堂と云あり。アマダ堂也と云。その
畔に前鎮守府將軍基衡室宗任女之墓、仁平四年（1154）甲戌四月二十日
と有。石碑は後人のそのあとへ立たる石也（中略）また、國衡館の跡、ケ
ワイ坂、車宿り、など云所も有。金鶏山と云へるも有。基衡、黄金にて鶏
を鑄て納む。鬼門を鎮せりと云へり。櫻川、辨慶松など云有。又田間に古
松あり。鈴木三郎墓、龜井三郎墓など云傳ふ。

扱中尊寺へかゝる。古はこの處も平泉と云へり。中尊寺村也。これは清
衡の時は白川（河）より奥は出羽を併せて廿四日地の地を領し、その眞中
なるを以、寺を立、中尊寺と云たりとぞ。往古は堂塔四十餘宇、禪坊三百
餘宇也し。今は一山十八坊あり。寺の舊跡のみにて、その内にも世に云ふ
ヒカリ堂、是は『東鑑』に金色堂と云。これは古の堂也。堂の残れるはこ
れのみ也。方三間四面、中の壇に清衡の遺骸、左に基衡、右に秀衡の遺骸
を納む。その上に佛壇をかまへ阿彌陀佛、その餘佛像を多くならへ置。皆
古佛也。柱は七宝莊嚴。その餘（原頭註―刀脇差山腰アリ、クサリテ形
ノミ也。樋ノ入タル痕モ見ユ。目釘穴ノ二ツアルモアリ）莊嚴美を盡す。

皆布きせ金箔だみ也。今ははげて木地の出たる所あり。檜の木柱也。やね
は板かわら、布きせぬり也。今はその堂の上へ五間四面の堂を建風雨の損
敗をふせぐ。堂は再興也。經藏、本尊文殊、左右に經箱黒漆、青貝の字を
彫入。紺紙金泥は清衡納む。紺紙金銀字は基衡、宋板のは秀衡納むる由。

水火珠徑一寸二三歩、蛇牙一藕糸袈裟等あり。辨天堂（これも再興なり。
マンダラも百年來の物と見ゆ）には最勝王經の曼荼羅十幅、黒漆の厨子
に入、紺紙金泥十級也。愛宕堂地藏・八天狗像・辨慶像等あり。その餘堂
社數々残れる處、皆再興にて古佛等を安置す。又『東鑑』にある人色の大
日、日本にて初て玉眼を用て運慶が作しと云へるもあり。鐘樓堂、つり
がね龍頭なり、環にてつりたり。銘曰、「抑考平泉中尊寺草創歲序、長治
二年（1105）春、藤原清衡公、忝賜堀河鳥羽勅詔之靈場也。爰建武四

年（1105）春、藤原清衡公、忝賜堀河鳥羽勅詔之靈場也。爰建武四

年（1105）春、藤原清衡公、忝賜堀河鳥羽勅詔之靈場也。爰建武四

年（1337）回祿、成阿闍、薩埵頼榮、勳堆鐘利生志、于茲銘、開山曉鐘、覺無明眠、鷲嶺晚嵐、拂煩惱塵、摧伏魑魅、感降靈仙、悉極六道、下達九泉、劍輪輟苦、鯨音無邊、普配聖賢、四化父母、利物心堅、鑄師散位藤銘加鏤字、永不朽傳、康永二年（1343）大歳癸未七月日、鑄師散位藤原助信、願主權律師頼榮、大旦那左近將監平親家、大旦那當國大將沙彌義慶」と有とかや。この銘、文をなさず。然ども舊を存して寫をきぬ。その餘、田間舊跡不可枚擧。衣關（衣關は里民指す所は高館に近し。關の可有所に非ず。恐くは舊所を失せる也）など云へるも有。又、北の山の麓（原頭註一向二駒方嶽、衆山ノ上二屹立ス。）川あり。頼朝、泰衡追討の時は奥軍は伊達大木戸を堅めたるゆゑ、出羽より山ごえに不意を討たりと云へる、その道路、今は陣場と名付り。田間に泉三郎屋敷、金賣吉次あとなども見ゆ。義經館の跡と云は小高き山上也。これを高館と云。後世義經宮を建て有。その下を柳御處、清衡・基衡二代居所、伽羅御所、秀衡・泰衡二代居所と云。然るに里民傳ふるは、この館の下に北上川と云へる大河有。南部より流て石巻へ落つ。この川、古は束稲山（タバシネ山は高館の東にあり）の山下を流れて、この館も今の如く狭からずと云へり。且義經館と云へる所、古の本丸のあとと見ゆ。その餘、勅使屋敷、隆衡屋敷、辦慶屋敷、西明寺洞など、猶又種々傳ふる所多し。櫻川も今は小橋の下を名づく。古はタバシネに櫻數千本を植て花の散しきて落たるを以名付たりし。今は北上川も流をかへ、花樹も枯失たりと云へり。毛越寺・中尊寺は『東鑑』にも委し。歸路野店に入り休す。主人も古跡を暗（諳）んじ暫く話す（後略）

六 『奥州紀行』 宮田伊之

安永六年（1777）六月に僧侶の山隠とともに行った奥州路の旅の絵入りの紀行文、宮田伊之なる人物は未詳である（『南部叢書 六』1971南部叢書刊行会編 歴史図書社発行より）。

「（前略）七日かんなり（宮城県栗原郡金成町）泊。おのやさわへよりかんりの間に義經の腰かけ石、あねはの松、植繼の松とて何の風情もなし（中略）八日 關山中尊寺、俗に光堂といふ、はせをのほつ句に、

五月雨のふりのこしてや光堂 はせを

（以下は中尊寺の僧侶の様子の記述であり平泉文化とは直接的な関係はないが、類例のない内容であるので紹介する）

八日晝七ツ半頃此寺に行申けるは、日も暮に及候間今晩一夜宿仕度由申候得共、僧五六人居て挨拶に、住僧他行に付宿借し申事相成不申候と申故、暫足を休所詮宿借し不申候ハ、一足も早く下山可致と連えも申候得ば、さあらばいそぐべしと既にたゝんとする時によめる、

嶺の寺黄昏時に宿乞はつれなく道をおしへつるかな これゆき

是より道十五里あなたに前澤といふ所に泊有。一足も早くいそかせ玉へと被申けり、又草鞋の緒をしめ直し思ひ切てたゝんとしければ、又僧一人出て殊の外の御難儀と見受たり、茶漬斗りにてくるしからず泊玉へと申たりける時に又よめる、

汲て知る旅のなさきを山の井の水にはなさぬ墨染の袖 これゆき

と申て足などあらひ、座敷えとほりければ、地爐のそばに住僧と見へて、是は くめづらしき御出かな、當寺へ旅人號している くのおふれ者来るよし、斯つれなくは申たり、必心によ（と）め玉ふな。今宵は心易く咄も聞、ゆるくと休玉へなど申て、案に相違の挨拶して、絹布の夜具、本堂の廊架廿六間ほど隔て其夜も四方山の咄も過て臥したり。

あくれば九日節句にて、末寺よりおのく當日の祝儀に參り餅菌（クサビラ）扱持來り一日一夜碁打、折しも、大雨なれともきのふの挨拶もあれは立出べくとぞ申けり。住僧達而四五日も逗留可致差止候ゆへ此所に逗留す。昼は餅、夕めしは初茸めしを馳走に被致たり、初茸をしほ茹にしてしぼり、此水にてめしを焚、初茸をおかませにして清し、醤油大こんの辛、

袖子の役味、みそ汁も初昔の摺流しに豆腐の汁也。大こんのくきの香の物、誠に饗應不淺思ひ也。あるしの僧へ椰子の水吞を參らせける。

夜の八ツ過より天氣に成り、寝られぬまゝによめる、

五百年のむかしはさそなひかり堂あめのあしへの中に見るさへ これゆき僧の碁を打けるを見てよめる狂歌、

生キ死モシラデ紙張の紙ヨリモキルレバツナグタビノヒトヨニ

十人斗り集りける僧の籠服をよめる、

粧ねば苔もすくなけれ中々にましらとともすみそめの袖 これゆき

十二ヶ寺の内二ヶ寺清僧十ヶ寺は肉食妻帯なり。毎年二月初午に僧集りて能を興行致よし。定而滑稽有へき思ひやられたり。また栴しめしといふ菌有、栴色也。

是より十日朝立て案内を連れて達谷といふ窟へ行く。○圖あり。「岩家に作りかけ穴より外に九尺程出たり」「不細工なるあみだを切付置たり」（大日如来の磨崖仏のことか？）などあり。此所昔大竹丸といふ鬼の住所也。山の高サ五六丈斗り岨作り也。坂上田村丸退治玉ふ、今は毘沙門天立せ玉ふ。

みちのくの片岡山のほとゝきすいなせの渡しかけて啼らん 西行

中尊寺縁起別紙に有。

十一日 一ノ關泊。此所迄平泉より二里戻る。象潟えおもむく川口（栗原郡一迫町）といふ所へ行（中略）川口より小僧へ廿八丁かちや澤（以下玉造郡鳴子町）、六丁一り十五り。此所に川度といふ所に温泉有。家數廿四五間、又五丁行て鳴子、此所にて湯治致也。なるこは泣子也。むかし義經おさなくして龜割坂を越んとて大難所故なき玉ふ。よつてなき子といふと里人申。此邊龜割坂やすみ場村義經の休たる村なり（後略）

七『奥細道菅菰抄』蓑笠庵梨一

安永七年（1778）刊。『おくのほそ道』の約百年後に刊行された註釈書、

文中に記された歴史的諸事象・伝承などについての知識や評価を知ることができる。蓑笠庵梨一は武蔵国児玉郡の人、江戸中期の俳人、1714〜83。

▲上

①佐藤庄司が旧跡は―「庄司は、秀衡が家臣にて、信夫郡を領し、信夫ノ庄司佐藤元治と云大職冠の裔、次信忠信が父也。」

②又かたはらの古寺に一家の牌を残す。中にも二人の嫁がしるし先哀也―「此寺は甲冑堂（福島市医王寺）といふ。佐保川の辺にあり。佐藤次信、忠信ノ二人が妻の、甲冑を著たる木像あり。故に堂の名とす。兄弟戦死の後、二人の婦、甲冑を著し、軍戦の粧ひをなして、遺れる老母を慰めしと言伝ふ。和漢三才図会ニ云、「寺有竹二本、節間共相等、伝曰兄弟所持二本、旗竿、挿地活生。（按ルニ疑クハ、後世好事ノ者コレヲ植ルカ。此竹今ハナシ）」

③伊達の大木戸をこす―「伊達郡の入口にて、固塞の地、領主の封闕ある処也（福島県伊達郡国見町）。

▲下

④其夜目言法師の琵琶をならして奥上るりといふものをかたる。平家にもあらず舞にもあらず、ひなびたる調子うち上て―「盲ハ積名ニ、盲ハ茫也。茫茫無所見也、ト云。琵琶ハ、積名ニ云、本ト胡中馬上所鼓、推手前曰琵琶、引手却曰琵琶。因以為名ト。然レバ、本批把ノ音ヲ仮ルナリ。奥上るりとは、今俗の仙台浄瑠璃といふものにて、多く義経奥州下りの事などを作りて語る也。上るりは、豊臣秀吉公の侍女阿通と云もの、牛若丸と三州矢作の長が娘浄瑠璃姫との事を編て書となし、十二段と名づく。後京師に滝野檢校、沢角檢校と云二人の瞽者ありて、此十二段に節を付てかたり始る。是よりして浄瑠璃の名ありと云。平家は、平家がたりを云、信濃前司行長が作にて、生仏と云瞽者の琵琶に合せ始た

る事、徒然草に見えたり。(按ずるに仙台上るりは此遺風なるべし。)舞は、
諷に似たるものにて、八島・高館・笈探シなど云名あり。越前の幸若、代々
専門たり。幸若・笠屋・台頭の三流有と云。ひなびは、鄙の字にて、いな
かめきたる事也。

⑤ 文治三年和泉三郎奇進と有。文治ハ、後鳥羽院ノ御宇ノ年号ナリ。和
泉三郎、名ハ忠衡、秀衡が三男ニテ下ニ詳ナリ。(此年秀衡死スト云) 奇
ハ寄ノ字ノ誤ナリ。

⑥ 渠は勇義忠孝の士也。佳名今に至りてはたはざといふ事なし。勇義忠
孝の士とは、按ずるに、義経奥州に居給ふうちに、秀衡死す。こゝにおも
て、嫡子錦戸太郎、次男伊達次郎(泰衡)を初として、一属(族)ことぐ
く叛逆して、義経を攻む。忠衡ひとり義経にしたがひ、高館にて戦死す、
と云り。(猶下に詳なり)夫よく父の遺命を守りて、義経を捨ざるは孝也。
よく義経に仕るは忠なり。兄にしたがはずして義経に従ふは義也。終に戦
死するは勇なり。佳は善也。佳名は聞エノヨキヲ云。

⑦ 十二日平和泉と心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞伝て云々。平
和泉は、秀衡居住の地にて、今走湯権現の社あり。秀衡が祖父、清衡の
霊を祀ると云。或書に云、平和泉の館は、無量寿院の北にならびて、西木
戸には、秀衡が嫡子太郎国衡が亭(邸)宅あり。三男忠衡が家は、泉屋の
東に有。又無量光院の東に、加楽と名付て亭(邸)宅あり。秀衡これに居
住すと云。(按ずるに、平泉、高館、衣川の辺は田村家の城下一ノ関と云
より程近し)(後略)

⑧ 三代の栄耀一睡の中にして(中略)秀衡が跡は田野に成て金鶏山のみ
かたちを残す。三代ハ、清衡・基衡・秀衡ヲ云。清衡ガ父ハ、俵藤太秀郷
六代ノ後胤、巨理権、大夫経清トテ、安倍、貞任が妹婿ナリ。前九年ノ合戦
ニ、経清、貞任ニ属シテ戦死ス。頼義、経清ガ寡婦ニ、二歳ノ男子ヲ添テ、
武則ニ賜リ、妾トス。此ノ男子ハ、乃チ清衡ナリ。其ノ後武則ガ実子武衡・

家衡叛逆ス。清衡一人、義家ニ属シテ戦功アリ。是ニ依テ、奥州静謐ノ後、
伊沢・加(和)賀・江刺・稷(稗拔)・志波(紫波)・岩手ノ六郡ヲ賜リテ、
清衡・基衡・秀衡、三代コレヲ領シタリト云。

一睡のうちにしてとは(中略)

秀衡ガ居蹟ハ、前ニ見タリ。田野に成てとは、文選古詩ニ、古墓、犁、
田、松柏、摧、為、薪、ト云ル形容ナルベシ。金雞山ハ、秀衡建立ノ伽藍
地ナリ。或書ニ云、当国ノ中心、山ノ頂ニ、一ツノ墓塔ヲ建ツ。寺院ノ中
央ニ多宝寺アリ。其ノ中間二路ヲ開キ、往還ノ便トス。次ニ釈迦同、両界
堂、両部の諸尊ハ、皆金色ナリ。二階大堂ハ、高サ五丈、三尊ノ弥陀ヲ安
置ス。金色堂ハ、内殿皆金色ナリト云。(乃金雞山ノ事ナリ)○按ずるに、
此一段は、是三代の盛を述んが為に、又端を更めてしばらく記の跡に筆す。
されど、記は賦に劣れば、前の松島の段よりは、文勢いさゝか軽し。故に
発端のことばを置かず。是亦其指揮を熟考すべし。

⑨ 先高館にのぼれば北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめ
ぐりて(中略)康衡等が旧跡は衣が関を隔て(中略)夷をふせくと見えたり
—高館は、義経籠居の城跡にて、今半畑となる。片岡、亀井、鷲尾等が
戦死の跡は、小松を植て苗を遺す。近き比、此地に祖翁の碑を建。夏草
や、の短冊を埋て、たんざく塚と云。北上川は、名所に非ず。南部も、奥
州のうちに、津軽秋田に隣る、南部侯の領知也。衣川は、磐井郡衣が関
の前を流る。古俳諧歌に、きのふたちけふきて見ればころも川すそのほこ
ろびさけのぼるらん、と云あり。正しき名所にや、未詳。此川の中の瀬と
云処にて、武蔵坊戦死せしと云印の松あり。和泉が城は、和泉、三郎が居
城を云。康(泰)衡は、秀衡の次男、伊達、次郎を云。衣が関は、名所なり。
詞花、もろともた、まし物をみちのくの衣がせきをよそに聞かな、和泉
式部。夷をふせくは、蝦夷の敵を防ぐなるべし。古は北越のうち、及び秋
田、津軽の辺など、多く蝦(蝦)夷の地なりし由、白石先生の蝦夷志(蝦

夷志、享保五年（1720）自序）に見えたり。○義経追討ノ事、或ル説ニ云、秀衡病テ將ニ死ントスルトキ、竊ニ三子ニ遺言シテ云、鎌倉將軍ハ、人トナリ、頼モシゲナシ。嘗テ義経ヲ亡ボシ、且我ガ所領ヲモ奪ハンノ志アリト見ユ。然レドモ、我レカク存命テ在ル故ニ、イマダ手ヲ出ス事アタハズ。我レ死セバ、必ズ鎌倉ヨリ義経ヲ討ベシ。左アラバ、汝等ガ身モ亦危フカルベシ。所詮我ガ死後ニ到リ、国衡（錦戸太郎）康衡（伊達次郎）ハ、伴テ鎌倉ニ属シ義経ノ討手ヲ願ベシ。忠衡（和泉三郎）ハ、義経ニ從テ、權ニ是ヲ拒ギ、義経、及び義経ノ近臣ノ功アル者ヲバ、皆鰈夷ヘ奔ラシムベシ、ト囑付テ、秀衡死シス。果シテ幾許モナク、鎌倉ヨリ義経追伐ノ聞エアリ。是ニ於テ、三子ヨク父ノ遺命を守リ、国衡、康衡ハ、高館ヲ攻メ、忠衡ハ、義経ニ代リ、自殺シテ焼死シ、人ヲシテ其形ヲ知シメズ。近臣龜井、片岡、弁慶方徒ヲモ、亦各人ヲ代ヘテ戦死セシメ、義経ヲバ、近臣ト俱ニ鰈夷ヘ送ル。其後国衡、康衡、兄弟モ亦終ニ頼朝ノ為ニ亡ボサル。義経を鰈夷ニテハ、ギクルミト云。後ニ義経、中華ヘ渡リ、名を義行ト更メ、仕テ列侯トナリ、義行王と称ズ、ト云リ。按ルニ、鰈夷志ニ云、鰈夷俗、尤敬神、而不設祠壇、其飲食所祭者、源廷尉義経也。東部有廷尉居止之墟。土人最好勇。夷中皆畏之。夷俗凡飲食、乃祝之曰オキクルミ。問之則子曰判官。判官蓋所謂オキグルミ、夷中ニ所スル廷尉之言也。又云、西部地名、亦有弁慶崎者。或伝に、廷尉去此而踰北海云。又東都ノ俳士玄武房（げんぶぼう、各務支考の弟）予ニ語テ云、今ノ中華ハ、韃靼人ノ治ニテ、世ヲ清ト云。其ノ先ハ義経ヲ祖トス。故ニ世号モ亦清和源氏ノ清ヲ取ト。乃チ清朝ニテ撰述セシ図書大成ト云書ニ載スト聞ヌト。按ズルニ、今清朝王城下ノ戸戸、義経ノ画像ヲ門柱ニ貼事、鰈夷志ニ見エテ、玄武房ノ談ト符合ス。義経高館ニ死セズ、鰈夷ヲ経テ、中華ニ渡ル事ハ、実ニシテ明力ナリ。

⑩功名一時の叢となる。国破れて……（文学的説明なので省略）。

⑪ 経堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め三尊の仏を安置す。（中略）七宝散うせて、（中略）既に頽廃空虚の叢となるべきを一按するに、是皆金雞山のことを述るなり。経堂は前に註する釈迦堂、両界堂のうち歟。光堂は、金色堂を云。三將三代は、清衡、基衡、秀衡なり。三尊の仏を安置すとは、前に云、大堂破壊して後、其本尊を光堂のうちへ移し置たるなるべし。源氏一統志（馬場信意（のぶのり）著）に云、清衡、三尊の像を運慶に作らせ、美を尽すのあまり、尊像の眼中へ玉を入る。是日本にて、玉眼の始なりと。七宝ハ、法苑珠林（668成立の仏教典籍）ニ云う、長阿含經ニ云、一金輪宝、二白象宝、三紺馬宝、四神珠宝、五玉女宝、六居士宝、七主兵宝。又或ル説ニ、瑠璃・玻瓈・碑磔・碼碯・珊瑚・琥珀・真珠ヲ七宝トス。或ハ真珠ヲ除テ、金銀ヲ加ル説モアリ。按ズルニ、此兩説ハ或ハ法華普門品ヨリ出ルカ、頽廢ハ、クツレスタルト訓ズ。空虚ハ、二字トモニ、ムナシト訓ズ。

八 『菅江真澄遊覽記』

以下に菅江真澄の日記に記載された関連項目を挙げる。真澄の平泉等に關する記述は複数回あり、しかも膨大な紙数にわたっている。ここでは平泉・衣川に限定して紹介する。なお、菅江真澄の日記の詳しい紹介、とりわけ常行堂の摩多羅神の祭礼のそれは別に行う予定である。

菅江真澄（1754〜1829、いわて来訪当時は未だ白井秀雄・三河秀雄などとも名乗っていた）は三河国渥美郡（現愛知県豊橋市）の人。30歳の天明三年（1783）に故郷を出立し、以後、文政十二年（1829）76歳で角館で亡くなるまで、北海道から東北地方の旅の中に生活した。その間に多くの紀行文・地誌・スケッチ類を残し、日本民俗学の先駆者と呼ばれる。いわての地には天明五〜八年（1785〜88）の足掛け4年間滞在した。

八一①『けふのせばの』天明五年(1785)八月〜十月

盛岡藩領鹿角郡(秋田県鹿角市)を通過し、九月初、二戸郡から盛岡に至り、九月十日花巻着。二十七日黒沢尻を経て十月一日、仙台藩領江刺郡片岡村(旧江刺市岩谷堂)まで来た日記『菅江真澄全集 第一巻』1981 未來社発行より)。

「九月 九日(前略) 日話(紫波郡紫波町)といふ処あり。これなん、清衡の四男樋爪太郎俊衡入道の館の址は、五郎沼のひんがし北に在といへば、処の名にもいふならん(中略)

廿七日(前略)(花巻にて) みちの左に鳥屋崎の城といふ、これなん琵琶の柵といひて、安陪(倍)頼時のつ(築)きそめ給ひしとかたり、又道のゆんで(弓)めて(馬手)に、としふりたる槻と掠の生立るを筆塚とて、頼朝のむかはせ給ひしころほひより、生ひ立りし木にてありつなど(中略)

(北上市二子町にて) 此処和賀主馬の君の遠つおやは、多田薩摩守頼春の末也。頼春の君は、伊藤入道祐親の女満幸の前のうめるころ、祐親入道都より帰来て此ちごを見て、こは、たがぞ男やあらんととふらふなり。瓜なんふたつにはやしたらんがごと能似たりと、にくさげに足もてかいなで、こなたにおもむけてけり。すけちか、なに頼朝の子なるか。平氏への聞え、又つみんと(罪人)のたねといひ、たすくべうもあらじと、はらぐろにのしり、水深き淵に捨べし、とく、くといへれば、すべなううしなひ奉りしとこたへて、齋藤五齋藤六と、曾我太郎祐信とこゝろをあはして、このをさなき君を、人しらずたすけまゐらせはぐくみたてて、頼朝、あめがしたをまつりごち給ふのときをまち得て、君、信濃の国善光寺にまうで給ふをりしも、みちすがら、このわか君のうへを申いづれば、頼朝公になう(似無)めでよるこび給ひて、梶原をめして、いづらかの国にか二三万石のところやあらん、とらせよとのたまふに、みちのくならで、かきたる城もあらざ

るよしをけいすれば、それにとのたまひしかば、住給ひしとなんいひ傳ふ(中略)

廿八日 あるじにいざなはれて、阿部(安倍)のふる館のあと見にとて行ぬ。加志(北上市黒沢尻町河岸)といふ処に、黒沢尻四郎政任のありしいにしへを偲ぶ(後略)」

八一②『かすむこまがた』天明六年(1786)一二月

胆沢郡徳岡村(旧胆沢町小山)の村上家や六日入村(前沢町白山)の鈴木家に滞在し、正月行事や毛越寺常行堂の摩多羅神の祭礼を見たことなどを記す。

「二月 二十日 けふは磐井ノ郡平泉ノ郷^{サト}なる常行堂に摩多羅紙の祭見んとて、宿の(村上)良道なんどにいざなはれて徳岡の上野を出て、はや外は春めきたりなんど語らひもて行く。(中略)道よりひむがしの方に名におふ大桜とてあり(中略)いにしへ秀衡、東^{スズノ}稲山に千本の桜を植^{ウヅ}られし事あり、そのころのたねならむといへど、此大桜は千歳^{チトセ}ふる木ならんと人々のいへり(中略)右の方に白鳥明神の塔の跡も雪にふり埋れ、白鳥ノ二郎行任が名は世に人しれり。徳沢長根の雪の片^{カタ}岨^{シノ}に小松の群^{ムラタテ}立るは、輝(照)井ノ太郎が陣取し地なり(中略)此里(瀬原)の良^{ヨシ}の方に小松が館といふあり、そは、阿部(安倍)ノ兄弟^{ケイ}栖家^{スミ}たる瀬原ノ柵ともいひ(し) 処といへり。浅からずおもひそめしとよめる衣川を橋より渡る(註・浅からず思ひそめてし衣河かかるせにこそ袖も濡れけれ『続後拾遺集』清原元輔)。

此水むかしは良^{ヨシ}に落^おて、今は東に流ぬ、そこを押^お切りといふ。(中略)此衣川の源に、清浄が滝とていとく大なる滝ありし慈覚大師衣をあらひ、かたはらの木(に)かけて乾^かし給ひしよし(中略)それより滝を衣の滝、その流の末を衣川といふといへり。順徳ノ帝「風冴る夜半に衣のせきもりはねられぬまゝに月やみるらむ」(『続子撰和歌集』巻第八)とよみ給ひしその

関の古跡トは、鵜ノ木(奥州市前沢区)といふ地に在り。今は來藻ノ里(奥州市衣川区)は(の?)卯の方にあたれり。むかし束稲山の麓に桜あまた植て、此桜の花影上川(北上川をいふ也)の水にうつり散れば(中略)秀衡、北上川を桜川と名附られて芳野川にもをさく劣らざりしが、今は束稲山には桜一樹もなく、中尊寺の辺を桜川とよびて、酒酷亭、そをいへるのみ(中略)また阿倍(安倍)ノ則任が居城衣川に在りて、一ノ城堀へも二ノ堀へもみな衣川の水を落したる地也(中略)いとくふり生る一本は鈴木ノ三郎重家が塚ノ松、また権ノ正兼房がしるしの石などあり。弁慶が壘松を見て、人みなイミ歌よめるを聞て、

松がねに苔こそ埋めむさしあぶみさすがに高き名やはかくる、

しかして中尊寺にまつてむとていたる。そもく此中尊寺といふは、鎮守府ノ將軍陸奥ノ守奥羽兩州ノ押領使從四位上少將藤原ノ朝臣秀衡入道世に在りしころ、白河ノ關より外が浜まで千本の率塔婆をさして、そが中央にあたりとて中尊寺とはいへるとなむ、真名は弘台寿院といふ。鼻祖は円仁大師にて嘉祥三(850)年に開給ひし御寺といへり。こゝに白山ノ神また日吉ノ神をうつしまつりて、此二柱の御神山をまもらひ鎮座り。

四月ノ初午ノ日は白山神の祭にて、七歳男子を馬に乗せて粧ひたて、白兎の作り物あり。此白兎は從者にて、もろこしより神のぐし給ひしまねびといへり。此処に齋奉る白山ノ神靈は八十一隣姫の神にはおはしませず、その韓神にてぞいまそかりける。其日は田楽、うば舞、さるがうななどありて、賑へるよし人の語る。経蔵に戸ひらかせて入れば、立獅子に乗る文殊師利菩薩、獅子の口索曳持るは浄明居士、また笹さゞげ立るは善財童子、また仏陀波利、優闍王などの仏は、みな毘首掲摩が作レリといふ。うべも、めもあやに、あが国にはもともまれ(な)る御仏也けり。また釈迦佛一世の經典納経の始は、七十四代の帝鳥羽ノ院のみくらみにつかせ給ふとし、天仁元(1108)年戊子ノとし藤原ノ清衡寄附せり。世に名ある手

かきの僧を集めて、古キ寺々に在る經典を紺紙に金泥してか、せ、また一ト行りは金泥、一ト行りは銀泥の文字して書たるあり。此經典卷たるはみな木瓜の紋あり、そが家のしるしにや。また基衡納経はおなじ紺紙に、金泥の文字ノ色ことにつや、かに見えたり。此多かる經典の中には、今し世にある一切経とは文字の多少、訳のかはれ(る)もありといへり。また婆粉紙とて黄色梵本の経あり、そは宋板にして秀衡寄附のみり也。此経筐の文字はみな螺鈿をちりばめ、また唐櫃の内より大蛇の齒、水火ノ玉ひとつ、藕糸ノ袈裟などとうだしてぞ見せける。金色堂、そは俗光り堂といふ、扉をおしひらけり。こは天仁二(1109)年己丑ノ春清衡ノ建立の堂にして、七宝莊嚴の卷柱、戸枚の光り、長押の螺鈿など、みなそのさま、からめける細工也。そが中に觀世音菩薩、勢至菩薩、地藏菩薩、三尊のほさち立給ふ。そが中の座の下には藤原清衡の棺あり、大治元(1126)年丙ノ午ノ七月十七日逝去。左の菩薩の下には基衡の棺を隠せり、保元二(1157)年丁ノ丑ノ三月十九日みまかれり。右ノ方のぼさちの下には秀衡入道の棺あり、文治三(1187)年丁未の十二月廿八日みまかれり。また入道の棺に、和泉三郎忠衡が頸桶を後に内たりといへり。その三代の人々の軀には羊の脂肪を塗て、巴牟耶といふものもて棺に攻て、沙羅布といふ布にて上へを包み封たりといふ。年を経て布もくちやれて、ふむじも解ぬれど、此棺をひらけば、つめたる藥氣はつとたちて、つゆばかり眼に入りても首瞥となりとて、誰れひとり手やはふる。また、なにのよしありてやひらかむや。清衡、基衡、秀衡三代の横刀あり、その飾ななどいふべうあらじ。建武二(1335)年乙亥の春野火にかゝりて、堂社僧房院々残りなく、四十七宇の洪鐘もみながら回祿て、時の間に灰となりしとなむ。さりけれど此金色堂のみ焼のこり、また経堂も屋根のみ焼たれど内には事なう、いにしへを見るに足れり。此光り堂、経蔵のみまたたくして、その外は御仏のみぞのこれる。また弁慶が九寸五分といふものあり、そは山賤のも

たる山ナタ鋌タテてふものゝごとく、一尺二三寸のかねを厚アツクとうちのべたるものに、劍柄ツツカは透スガしにて、手をさし入イして握ニギしものとおもはれたり。むかし京都キョトにて、ある小寺の開帳カキのとき、其宝物の内に見ミし破石ハセ刀トウといふものありしが、その破石ハセ刀トウのさまに似ニたり。これもなか く弁慶ベンケイ時代のものにはあらじ、いと くふるきものにこそあらめ。また康永コウエイ二(一三43)年と刻キりたる洪鐘コウネひとつあり。堂舎ドウシャもみな、かりやとおぼしくて四阿マア兩下リョウゲめけるさまに作サれり。弁財天ベンサイテン女メノ堂ドウに金光明コンコウミョウ最勝サイショウ王オウ経キョウの曼荼羅マンダラ十卷ジュクワン、みな金泥キンネもてそのあらましを彩イロガかきたるは、めもあやに見ミえたり。堂舎ドウシャ僧房ソウボウの在アりし古跡コソコを見ミめぐりて、物見モノミとて杉スギのむら立タる処トコロにのぞめば、衣河イカは糸イトすじのごとくみだれて加美川カミガハの流ナに落オたり。武蔵坊ムサシボウが流ナれたりし中の瀬セといふも今は田島タジマとなりぬ。和泉ワヅが城シロ、岸キの松マツ、亀井カメイの松マツ、蓮台レンだい野ノなンど残のこの雪ユキに埋カれたり。山口ヤマケノ堂ドウに、武蔵坊ムサシボウが七道具ナナドウグ負オひもて立タて、六尺ムサカまりに作サりて、いと く近チカき世ヨにすゑたるを見て笑ワふ人多タし。九郎判官クワラウハツカの館タカ高タカ館タカといへるあり、武蔵坊ムサシボウが館タカ跡アト、その外の兵等ヘイトウが住スしあとも、みな島シマとなり山ヤマ賤セの住家ジュカとなりぬ。義経ギキョウ堂ドウに登ノりてむとおもへど、雪ユキのいと深フカければ、ふたゝびいたらむ、はや日もかたぶきぬ、いでとて、こよひの神事カミコトにいそぐ。道のかたはらの雪ユキの中に八花形ヤツハナガタといふ処トコロあり、そは国衡クニケ、隆衡リウケが館タカノ跡アトにて、外堀ウチヅメなンどは千町チマチノノ田タとなれり。此ココあたり雪ユキいとふかし。小堂コドウあり、此堂ココドウの内に鉄塔テツトウとて、いと く大なる鉄塔テツトウの、なから碎クたるあり。そが内に女メの黒髪クワムいたく納ウめたり。いにしへ秀衡ヒデケの室ムロの、ぬけちりたるくる髪カミをかく納ウめられしものとて、今の世ヨかけてしかぞせりける。かくて摩多羅神マダラカミの広ヒロにぬかづく。いまだ人もこゝにいたらねば、今イマしばありて來キらむとて、千葉某チノハナノミヤノといふ人ヒトのもとに行イなんどて人にいざなはれて行イぬ。しかして此ココあたりを見ミわたり。慈覚ジカク円仁エンニ大師オウシ陸奥リウオウ国修クニシユ行ユキのとき、白毛シロケのちりこぼれたるをあやしみ此毛ココモを踏フミ越コて山ヤマに入り給たまふに、白鹿シロカにうちもたれ

て眠ネる老翁ラウオウあり。こは、いかなる人ヒトにておはしけるかと円仁エンニとはせ給たまふに、我ワは此山ココヤマを守マモる翁オウとて、鹿カとともにかいけ(ち)て見ミえず。円仁エンニ、こは此山ココヤマをひらきて、賤山セヤマ賤等セトウがために仏法ブツポフ流布リウフあれと神カミの造給ツクふにやとかしこみ尊ウみて、薬師ヤクシ如来ニライカネを安置アノマツリて医王イオウ山毛ヤマモウ越ウ寺ジ金剛コンゴウ王院オウインといふ。天台宗テウタイソウにてあまたの堂舎ドウシャ、あまたの衆徒シュトなンど蕤ウをならべて栄サえたりし山ヤマながら、元龜ゲンキ三(一572)年の野火ノヒにたちまちやけて、今は礎イシのみぞ残ノれる。また嘉祥カササキ寺ジ破壊ハカこぼれたるときは、堀河院ホリカワイン、鳥羽院トウハインの勅トクありて、ふたゝび興オして藤原フジワラノ基衡キケの建タりといふ。また嘉祥カササキ寺ジにおしならべて円隆エンリウ寺ジといふも新アラに建立ケンリツありき。その時の勅使トクシは左少弁ササウヘ富任トモトシノ卿キョウ也。富任トモトシ、三年此平泉コノヒラヒに住スり、その跡アトは勅使トクシ屋敷ヤシキとて、今は島崎房シマザキボウとて衆徒シュトすめる也。また康元コウゲン(一256(57)、正嘉(一257(59)のころならむ、相模守サモノリ時頼トキタカ、最明寺サイメイジして落オシたまひて、法ホウノ名ナを覚カ了リョウ道崇ドウシュウと号ナヒて国々クニクニめぐり給たまひ、こゝにもしばし杖ツツを曳ヒキとめられしといふ庵アトの跡アトあり。また舞鶴マヅルが池イケも雪ユキに翅ツバのふり埋カれ、梵字バンジが池イケ、鈴沢スズサキの池イケ、柳ヤナギの御所ミヤドは、清衡セイケ、基衡キケの館タカの跡アトにして、其ソノむかし江刺エサノ郡ノ豊田トヨタノ館タカをうつされて、豊田トヨタノ御所ミヤドとも云イひし(と)なむ。又秀衡ヒデケ、泰衡タイケノ館タカは伽羅樂カハララクノ御所ミヤドといふを、人ヒトみな。からの御所ミヤドと呼ヨり。また泉イヅミノ御所ミヤドともいへる、そは泉酒イヅミサケとて豊酒トヨサケの湧トきたる事コトあり、酒サケは栄サカのよしをもて、居館イカドは泉イヅミノ御所ミヤドとも名附ナれつるものか。泉酒イヅミサケの湧ト出し池イケの跡アトを今は泉崎イヅミサキといふ、また泉三郎イヅミサロウ忠衡チウケも此処ココに住スみて泉イヅミとはいへるならむ、和泉ワヅのよしにはあらざるべし。また正月ムネツキのやらくるずりの唱歌ウタに「泉酒イヅミサケが湧トクやら、古酒フルサケの香カがする、妾持メナケの殿トのかな」また、今年酒コノサケが湧トやら、去年酒クノサケケの香カがすると唱ウたふ処トコロもありき。かたふかといふ処トコロあり、そは片岡カタカノ八郎ヤチロウ弘常コウツネが館タカ跡アト也。また鈴木スズキノ三郎サロウ重家ヒゲカが館タカノ蹟アトは弘台コウダイ寿院ジュイン(中尊寺チュウソンジの本号ホンゴウなり)の山ヤマの西ニシノ麓ノに在アり。又『円位上人エンイジョウジン選集抄センシュウセウ』に誌カル、その尼寺ニジの跡アトあり。また花立山ハナタチヤマといふ山ヤマあり、そは基衡キケの妻ツメ、某ソノノ年の四月シゲツ二十日ニジュウニチに身ミまかり、此室ココムロもろく花ハナを好スとて、

其日にあらゆる花を彩作りて此山（に）さして、室のなきがらをその花立山に埋てけるよし。基衡の室は阿倍（安倍）ノ宗任ノ女にして、和歌にも志シふかかりける人によ、木草花をになうめで給ひしといふ。今も四月廿日には僧あまた出て、かりに葬のさまして、目をすり掌を合せ数珠をすり幡を立て、宝蓋、宝螺、梵唄をうたふ。是を四月の哭祭といふ、もともあやしき祭也。むかしはこの哭祭の日は、知るしらず僧等とともに経をうたひ金鼓を鳴らし、あるは、その声どよむまで、よくと哭しといひつたふ。また忠信、次信が館跡は、高館の下なる地の岨めける処なり。義経の御館は高館とて、いとく高き処に在りて、その亂ノ世に九郎判官、これまでとて怨たる一章を口に含て御妻子とともにさしつらぬき、その太刀もて腹かき切り給ひしは文治五年閏四月廿九日、御年卅三、法名通三源公大居士と彫て、靈牌は衣川邑の雲際寺にをさむる也。

また『清悦物語』高館落のくだりに（中略）また『上編義経蝦夷軍談』高館落のくだりに（中略）同五卷「泰衡攻泉三郎忠衡ヲ」くだりに（中略）「忠衡密渡蝦夷」といふくだりに（中略）「海尊、尚勝帰于日本」といふくだりに（中略）」（これらの餘寶常生存物語については別稿を予定している）。

此平泉の金堂、講堂、法華堂、南大門、大阿弥陀堂、小阿弥陀堂、慈覚大師堂、無量光院、白山社、日吉社、祇園ノ社、天神ノ社、熊野十二所ノ社、金峯山、鏡山、隆蔵寺、伊豆権現ノ社、護摩堂などかぞふるいとまなき其薨々も、ただ礎を見るのみ、いとゞその世ぞしのばれたり。また金雞山といふ山あり、そは清衡の時世ならむか、黄金の雞雌雄二翼を鑄させて、埋みおかれしよしをもて金雞山とはいへり。こゝにうたふ「旭さす夕日輝く木の下に、漆千盃こがね億置」といへるは、此金雞山をさしていふといへれど、此歌はいにしへの童謡ならむか。出羽、陸奥に、いさゝかの違ひはあれど処々に在り。かゝるふる所、かなたこなたと見ありき千葉氏の家にいたり、日

のくらぐになりて宿を出る。此あたりの事は『吾妻鏡』にみなし給へど、つばらかにはえしも聞えず。

しかして摩陀羅神ノ御堂に入りぬ。宝冠ノ阿弥陀仏ませり、此みほとけの後裡の方に此御神を秘齋奉り。摩多羅神は比叡ノ山にも座り。まことは天台の金毘羅権現の御事をまをし、また素盞烏尊ともまをし奉る也。また太秦の牛祭とて王の鼻の仮面をかゝり、たかうなどをいなだき牛に乗り、手火炬うちふりて摩陀羅神の御前をはしる。また弘法大師の祭文あり。此事『都名所図会』につばらか也。

やをら神祭はじまれり（以下略。神祭の様子が詳述されるが、ここでは割愛する。なお、真澄の二十夜祭記述については別稿を予定している）。

「廿六日 空晴て長閑也。けふなむ達谷村（平泉町）にいたりて山王の窟（達谷窟）見んとて、千葉某かないして深雪ふみしだき、かついたりぬ。いとく高き窟の内に堂を作り掛たり。よこたふ梯はるぐと登れば内間ひろげ也。真鏡山西光寺とて坂上ノ將軍田村磨の建立にて、百八体の毘沙門天を安置、鞍馬寺を摹したる処といへり。そのいにしへ赤頭、達谷などいふもの此窟に籠るを、此君うち平給ひし（と）いふ。大なる円相の裡にさゝやかなる田村將軍ノ霊像をすゑまつる、そが右の方には、もろこしの軍扇をもたまへり。正月二日の夜は手火炬を投合ふ祭あれば、板鋪、柱みな燃たり。此むつきの二日の火祭を迫雛といふ。そのため、しか、ところどころむかしより焦たりといへり。百体八軀の毘沙門天王も、としふりこぼれて、今、はつかばかり残れるをすりして十体ばかりたてる也。蛇齒、鬼ノ牙などの宝あり、中尊寺に見しものにひとしかりき。梯子下來ぬ。五尺ばかり高く、鼻垂大仏とて岩面に刻たり。こは源義家將軍弓の上躰もて彫給ふよし、某仏の頭にやといへり。姫待が滝といふあり、また、かつら石といふあり。此滝のもとに達谷磨身を潜て、女の來るを捕りて蔓もてつなぎ、この岩に縛おきたるよし。また、葉室中納言某ノ卿の御娘を捕り

しものがりあり。此処に九葉の楓と(て)尖九ツありて、秋はことにやよけむ楓樹ありとて、や夕日影に解わたる雪かき分て朽葉拾ふ。また崩山といふ五郎櫃森ともいふ山あり、いかなるよしの名なるにや、知るてふ人もなし。五串の滝など見べき処いとく多かれど、雪消なばふたゝびとて千葉の家に帰る。

廿八(七)日 毛越寺のふる蹟見なんとて田の畔づたひして、礎の跡などいいにしへをしるのぶ。

(中略)

二月六日 あしたは春雨めきて、夕月ほの霞て出ぬ。琵琶法師来りぬ。是も慶長のむかしより三線にうつりて、猫の皮も紙張の撥面ニ化りたるが多し。曾我、八嶋、尼公物語、湯殿山ノ本事、あるは千代ほうこといふ女の戯ものがたりなソドの浄瑠璃をかたれり。こたびは「むかし曾我也」声はり上て、「ち、ぶ山おろす嵐のはげしくて、此身ちりなばは、いかゞせん」と、語り くて月も入りぬ。明なばとく出たゝむとて枕とれば、ひましらみたる。」

七日 ふたゝびといひて千葉の家を出たり。高館の猫間が淵のふる蹟、梵字が池のあせたる跡、中尊寺になりぬ。此あたりに勅使清水といふありいにしへ按察使中納言顯家卿こゝにくだりおはして、此水めし給ひしといふ。文治のいくさに焼残りたる庫の内に、牛黄、犀角、象牙の笛、水牛ノ角、紺瑠璃ノ笏、黄金の杓、玉幡、黄金華鬘(以玉簪之)、蜀江錦、ぬひめなき帷、こがねの鶴、しろがねの燈籠、南廷鉞、なほくさ ぐの物ぞ多かりける。そを右大将頼朝卿公わかちて、葛西ノ三郎清重、小栗ノ十郎重成などいふ人とならに此宝器どもを給はり(し)事は『東鑑』をはじめに書ごとに見えたり。そを見て御館の栄えたりし世ぞしのばれたる。

また『奥州征伐記』二ノ巻に「文治三年云々、秀衡が病氣の様子を尋ね給ふに、顔色老おとろへ最期近く相見えれば、もはや相果申つらむと言上

しける処に、奥州より秀衡が使者として、由利ノ八郎惟平鎌倉に来る。鷲ノ羽千尻、矢根、駿馬三拾匹、金作ノ太刀三振、砂金等進上す。これは秀衡がかたみのこゝろ也云々と見えたり。なほその篤厚事をおもふべし。(後略)

八一③『かすむこまがた 続』

天明六年三月 現宮城県栗原郡小迫村(宮城県栗原郡金成町)の古風の祭を見物に行つた旅の往復を記した日記。

「三日(前略) 又あねは村に、雀ヶ池といふ所侍る(中略) 義経、この水をくみて、硯に流して、家日記などし給ひしといへり、すゞりの池ならんといへり。義経の腰かけ石といふなるは(中略) (以下に、をばさま(小迫村)の小迫力山正太寺の祭礼の様子が詳述される)」「次はひさまひとて、扇してもふ、こは延暦のはじめ、みちのくなる、霧機山(中略)」

「四日(前略) 栗原邑、白馬山栗原寺(宮城県栗原市栗駒尾松) 医作山上品寺(同前) そやま(中略) 大荒木(大原木) 邑に、鈴木三郎の館のあと、尼我山喜泉院(同栗原市栗駒) は、鈴木三郎の妻(中略) 髪あらひの清水、かみなげし水、尼が森など(中略) 平形村(宮城県栗原市金成) に、つくり橋あり、江浦草といふ草(中略) 文治の頃、源頼朝きみ、泰衡うち給はんとて、此橋渡り給ふとき、くし給ふ梶原景高(景高次男)、戯歌ひとつ奉る。

陸奥のせいはいみかたにつくも橋、わたしてかけん泰衡が首
かくなん聞えたり(中略)

此あたりにねずの檀といふあり、いと高き処なり。泰衡のたゝかひの頃、頼朝ねずの番人をすへて、守り給ふ処なり(中略) 同邑(栗原郡有賀村、現宮城県栗原市若柳) に、御田取箱清水(中略) 平泉といふ処あるは(中略) 寛治七年(1093)のころ(中略) 八幡山金田寺(宮城県栗原市金成)を創し(中略) 藤太夫のめ(中略) 三ツ子をうむ、名を橋次、橋内、橋六といへり(中略)

橋次信高（中略）金売橋次といひ、又三条の橋次と人のいへり。橋次かへるさに、九郎判官義経、いまだ牛若丸と聞え給ふころ、鞍馬山に住給ひしを、承安四年（1174）のころ、いざなひ奉りて、姉齒の松を見、栗原寺にまうでて、この橋次か館につき給ひて、奥なる秀衡のかりに入給ひしといへり（中略）同（文治）五年（1189）八月、泰衡の亡ひ給ひて、長月のころ、頼朝の仰をうけて豊前介実俊、国なかのふるあとをあらたむるとて、神成邑書とかへ給ひ、即ち神成寺と記し給ひし処なるを、延文元年（1356）領し給ふ（中略）

「五日（前略、鬼首など出羽境にて）蛇王ヶ嶽、かめわり坂（中略）いばりし給ふ処を、尿前（宮城県大崎市鳴子温泉）といひ、初めて御うぶ声聞し処を、鳴子村（同前）といふといふ（中略）」

「七日（前略）畑邑（宮城県栗原市金成）にいたる。ふる寺のあと、鶏山、こがねの雄り、雌りを埋しといふ、にはとり坂（同前）（中略）錢沼（中略）一盃水（中略）」

「八日 ずさのをの神の社（平泉町祇園の八坂神社？）ありけるにまうづれば、瑠璃妻女稲田姫のをましもあり、みち聊か歩みて、ぜんあみ（平泉町毛越）といふ処につく。あるじの翁あないして、稗貫の館、鏡山（同毛越の伊豆権現堂）、富任の弁のやのあと（勅使屋敷跡）、景色の洞（秀衡世にありし比花がざりし処也）梵字箇池（無量光院の池）の中島は、無量光院とて、宇治の平等院をうつして、秀衡の建給ふといふ。みづから四壁に観經のこゝろをゑかき、扉には狩するかたをかひ給ひし、丈六のあみだぶち、三重の宝塔、みな灰となりしあと、なべて、雨そゝぎの石は、田の中に埋れながらあらわれたり。つくれる山（金鶏山）、滝落したる処、このころ無量光院の法師、助公と聞えしは、泰衡をしたひ、東をうらみ奉ること聞えれば、めしとられて、景時とはせたまへば、『此四代がほどまで、あが寺をはじめ、いみじく帰依し給ひしを、長月三日泰衡きられ給ひて、十三日空くもりて

名におふかげも見へざれば、とかなしう侍りてよみて侍る』とて、口ながら奉る。

むかしにもならざる夜半のしるしにはこよひの月はくもりぬるかな景時ほめて申しかば、ことゆへなしとやおぼしけん、御感あさからで、かへりてたまものありて、せめのがれたりとなん。

坂芝山といふ処あり（以下に慈恵大師伝説を紹介、省略）山のおくに口三間斗なる屋の、形ばかり残り、この女の名字、其姓も、其名流も尋たく、年月も考たく侍りしかども、詳々知れる人なく、しるすにをよばず。此処は、無下情なき里にて、廿余回の前の不思議をもたしかにしらざりけると書給ひしも、此山のことこそあらめ。

又五串村に骨寺といふあり。いかなる寺にて、いかなる人の、骨を埋しといふことをしらす。東鑑には、古津天良とかいたり、今は本寺といひ誤る也。是をも慈恵大師の欄體の物語にまじへてかたれり。

猫間が淵といふは、加美川のへた、今は田畠となりぬ。中島に、ねこまが扇に似たる石ありしゆへとも、又扇の前という女房のしつみたるとも、ねこまといふは、う（か）らめに、うはなりのふるまひに、此ふちに入たるとも人のいへり。

翁、金鶏山をゆびさしてまことやこの山こそ、うらをもとなく、筑たてたる山也、むかしより伝ふる歌は、

朝日さす夕日か、やく木のもとにうるしまん盃こかね億置く
又金億々ともいへり、よみし木はかれてなし。はるけき末の子にあたへむとて、秀衡の埋み給ふ也。又外かにかゝるところありといへど、知る人なし。

苔なめらかなる石仏に、金堂円隆寺と記したり。いにしへは九条関白（忠通）の御手の額をかけ、間毎くにしたる色紙形は、参議教長の書給ひて、いみじくめでたかりしも、毛越寺堂塔（四十余宇）禅房（五百余宇）みな基衡の建給ひしを、つれなき元龜（1570〜73）野火なりけるよなどい

ひもて、ちいさき森の中に入ば、三尺あまりの石に、前鎮守府將軍基衡室
安倍宗任女墓、仁平王申（1152）四月二十日、こは、あとをたづねて、
享保十五年（1730）にたてたりといふ。

そこを出て、やぶれたる石のぼさちあり、これのみににしへをしのぶにた
れり、そのかたはらに、ふせるがごとき石に書いたりけるは、「夏草や兵
ともか夢のあと」はせをの翁のわけけんしるしあり。

柳のもとに、泉酒の湧出でしところといふあり。

むかしたれくみしいつみのあとしるくいまもかすみいろに流れて天喜五
年（1057）の春、鎮守府にてまし、くけり、頼義のうし再びいくさをい
だして、六月五日、鎮守府をたちて、衣川にいたり給ふを聞て、頼時が弟
僧良昭兵をひいて戦ふ。つはものいきつき、渴をくるしみたるを見たま
ひて、はるけく岩清水を拝みて、弓箆にて岩根を穿給へば、豊泉湧出たり、
其流の加美河に落入たるといふ、それより北上川といふと云ふは、前太平
記などに聞へたり。しかはあれど、なんぶの植（桂？）清水のこと（北上川
の水源は岩手町御堂観音の湧清水）、むべならんを、このいづみ酒のことに引た
り。

判官館にのぼる。この丸、本丸など、すす竹生ひしげり、かひわけて坂を
のぼれば、もる男にやあらん、鍵もて扉をひらけば、義経のみすがたを木
にて作り奉る。御たけ三尺あまり、竜かしらの甲きて、右にから扇を持、
左にくさずりをおさえて、あくらにかゝり給ふは、いきてやおはしますか
とおぼふ。此きみ都を出給ふときは、義経を義行と書かへ、みちのくにに
は、義頭となりて、一条今出川の、久我殿の御姫みやを具してこゝに住
給ひし、又河越太郎が娘を具し給うとも、大納言時忠卿の御娘をぐし給ふ
とも、まぢくにいへり。ほろび給ふのとき、御女子に、しぬべきやう
をいひ送り給ひて、身まかり給ふと聞給ひて、かたなにづらぬいて、いき
絶給ひしかば、海尊と清悦と、はからひて、此館に火をかけて焼たりとい

ふ。此の清悦といふは（以下に義経生存伝説・北行伝説を紹介、省略）
物見といふ所は、加美川の高峯にて、長部山の頂に、手のさしとゞくべう
思ひたり（中略）又此山も卯月さつきに、雪残りてまだらなれば、駒形嶺
といふは、あやまれるならんか。又いねをつかねたる、おもかげあれば、
束稲山といふ也。

琵琶の柵のふる跡はいつこならん、翁は知らさりける、西行上人の文に云、
「十月十二日、平泉にまかりつきたりけるに（以下に『山家集』の西行の歌を
紹介、省略）翁にわかれて衣河にいたる。琵琶柵は、貞任すみて、門前に
桜あまた、植えたりしといへり。其桜ならんいとふりたる桜あり。今けん
だんさくらといふ。検断したるさぶらひや住みけん。花さかばふたゞびと、
こゝろにちきりたり。円位法師、松近川といふことを、

衣川汀によりてたつ浪はきしのまつかねあらふなりけり

この松はかれたり。ありしところは、道遠ければゆかじ。西行上人平泉に、
とし月をへ給ふと聞へしは、秀衡にゆかりあるゆへにやあらん。庵のあと
などありといへり（中略）いにしへこゝに、衣川殿といふありて、河登麻
といへる娘ありけるを（以下に袈裟と盛遠伝説を紹介、省略）」

八一④『はしわの若葉』

天明六年四月から、東磐井郡大原村（旧大東町大原）の芳賀家に滞在し、
付近を巡遊した六月までの日記。

「天明六年四月 八日（正しくは九日）けふの初午ノ祭見に中尊寺にいな
んと、六日入りをたちて前沢駅に出て、霊桃寺に訪ひて（中略）

うまやのはしなる大桜見てむとていたる。大桜ノ社あり、不動尊を祭る（中
略）こは秀衡時代の花也といへり（中略）

衣川村に来る。世に衣といふ処多し（中略）此処に検断桜とて名あるさく
らあり、秀衡の世に、検断の役するもの置れたる処也。またいにしへ、安

倍ノ貞任の館ありし跡にて、義家公「ころものたてはほころびにけり」と弓に箭をはぎ、むかへ給へば、「としを経て糸の乱れの古しさに」と貞任、矢つきばやに返しをしたりしなど語りひ、やをら其処にいたれば、

衣川みぎはの桜きて見ればたもとにかゝる花の白浪

此衣川も、今はむかしと大に流のさまかはりたりといふ。高館落城のとき武蔵坊弁慶、衣河を渡らむとてわたりしが（以下に、弁慶が川上に流れた伝説を紹介、省略）また、あぶり申さしつかね釣りおく巻藁てふものを、出羽、陸奥の方言に弁慶といふも、武蔵坊が、箭を藁のごとくおびたるさまを、まきわらに申さしたる姿に似たるよりいふとなん、里の翁の語りぬ。

かくて中尊寺にいたれば、あるとある堂の戸みなおしひらきて、白山姫ノ神社の拝殿は、かねて、かかる料に間広げに作りなしたるに、白き幌をたれ、白き帽額引わたしたり。おひとつつうまといひて白き神馬、獅子愛して、ぼうたん手ごにもたる童子なにくれとねり渡りはつれば、白山ノ神の御前に幌うちまうけたる舞台にのぼりて、そうぞきたつ田楽開口祝詞をすれば、若女ノ舞、老女ノ舞など、いと古風めかしきさま也。やをら衆徒集りて、さるがうはじまりぬ。法師の頭に宿髪てふものにして髪髻、墨衣の袖をぬぎかけ、あるは、まくりでにつゞみうち、笛吹囃しぬ。この田楽、をとめ舞、うな舞などに事かはりて今めかしけれど、舞へる装束は国ノ守より寄附給ふものとて、めでたく奇麗をつくしたり（中略）

いざ帰りなむと立騒ぐ上に、大なる杉の枯枝の落て頭うち、ぬかより血の流れたりなどなかゝの騒ぎ也。経堂、光堂の方へ逃ちる人もあり。また老婆杉とていとく大なる空樹あり、此木としふりて香馥はなはだしければ、国ノ守めして「みちのく」と銘給ひしといふ。その木も今は吹折レ、今はたふれなんなど、人みなをしみ語らふ。此中尊寺に、薄墨桜とていとよき花のありしが、枯て今はなし。それを弁慶ざくらといふ、むかし武蔵坊やうゑたりし花にや。中尊寺を出て義経堂にのぼりて人々ぬかづく。源九

郎判官の由来はこと処にもしるし、また、『清悦物語』とはいさゝかことなれり。また、此君の事をつばらかに記したる『義経蝦夷軍談』といふいくさの書には、泉三郎忠衡、また金剛別当秀綱、亀井、片岡をはじめ、御家人ひとりものこりなくみな松前に渡り、秋田ノ治郎尚勝兵糧を運送、此人とら大に戦ひ蝦夷治りて、上ノ国といふ処にて、御台所若君ひとこの誕生ありて、嶋磨君と申事など見えたり。人々を別れて、此平泉の相知りたる民家に泊る。

十日 けさもさるがう舞あり。こよひまた一夜なンドあれど、風なざたれば、此あたりの花のちり残るも見まほしく、また春のころ見し達谷ノ窟、桜原といふ処は名さへおもしろければ、ふたゝびとて平泉を出たつ。むかし悪路王ひそかに都（に）登り（中略）葉室中納言某の娘（中略）出羽国雄勝郡阿具路王が窟（中略）達谷磨の栖家（中略）五串村（中略）巖美ノ神一瑞玉山・水山邑の山王が窟（中略）此奥に平泉野といふ地あり。大日山中尊寺の趾、高林山法福寺の蹟、栗駒山法範寺の跡、尼寺の趾、円位法師の庵の趾あり、骨寺の跡あり。此あたりの寺々を、むかし七十四代鳥羽院の御宇、天永、永久のとしならむか、此平泉野より今の関山にうつし給ひしかば、そこも平泉の里となれり。今の平泉に逆柴山といふ名あり、是も旧平泉に在る山の名也。骨寺の事、尼寺の事は選集抄に見へたり（中略）五串の滝、玉の滝・小松が滝・京田滝・あたら滝・大滝・童子滝・はかり滝・魚屋滝・麻一持滝（後略）

八一⑥ 『はしわのわかば 続』

天明六年七月九月、気仙郡から宮城県気仙沼方面を巡遊した日記。

「七月廿四日（気仙沼市）海岸山普門院観音寺（中略）よし経のふる笈（中略）八月四日（前略）いはるの里になりぬ。おその袋の社・むろねの神・折壁・くまくら・千廐の石室・薄衣・検断紺野某氏に泊まる（中略）」

六日 面白川・葛西城の址・川崎・清悦の墳・門崎・松川・相川・舞草村・舞草社・作の瀬・山の目

廿五日 五串の滝見るとて行・赤荻村・あたら滝・珠の滝・をかせの滝・この山奥の逆柴山に円位法師を訪ねた女の立てた石（後略）

八一⑥『ゆきのいさわべ（雪の胆沢辺）』

天明六年十々十二月、磐井郡山の目（関市）の大槻家、胆沢郡徳岡村の村上家ほかに滞在し、胆沢郡などを巡遊した日記。

「十月」廿七日（前略）朝とく衣川に來りて、西行上人むかし此あたりにたゞずみて（空白）かくなんのたまひけるも、いましころにやあらんなどひとりごたれて、此土橋を過るに、うすらひにふたがりたる水の面にくち葉ちりて、霜いとふかし。

衣川みぎはにむすぶひもかゞみ冬の日数やかさねきぬらん

廿八日 十二月、秀衡のあそ六百年のいみにあたり給ふを此日ものし給ふとて、人々中尊寺にまうでければ、朝とく山の目を出て此御寺に入ぬ。知足院のみほとけの御前にいたれば、しら布のかへしろかけて、こなたのひろびさしに、さるがうすべきまうけしたり。みほ（と）けのかたはらにはこゝらの人あつまりて、けふの手の向のから歌、やまとうた奉るとて、冬懐旧といふことをうたふ。

埋れぬ名のみばかりはあらはれてゆきにあとなきむかしをぞおもふ

あまたのまうづる男女、こはいにしへ、いでは、みちのおくのくにをまつこちて、しら河のせぎより、そとがはまに行べきみち くに、そとばをさして、此みてらはなかなばにあたれるとて、いたくあがめ給ひしなど、此きみの、あはれいにし也けるよとてなみだがしぬ。やがて笛ふきつゝみならして、さるがう三たびかなでてはてぬれば、日くれぬとていそぎいでぬ

（後略）

八一⑦『いわてのやま（委波氏迺夜鷹）』天明八年（1788）六々七月

天明八年六月半ば、胆沢郡前沢（旧胆沢郡前沢町）から念願の松前（北海道）を目指して出発し、七月初めに野辺地（旧青森県野辺地町）に至るまでの日記（菅真澄全集 第一巻 1981 未来社発行より）。

「六月」廿四日（前略）倉沢（旧江刺市稲瀬）といふ村に出て、見やる高岨に松杉に生ひまじりたるは古館とて、鶴脛五郎家任のいにしへをし（中略）

廿五日（前略）極楽寺の軒にまくだりに門岡村（北上市稲瀬町）に出て、あないうぬ。このあたりに、雀の宮といふさゝやかなる社のありと、かねて聞しかば、とひたづねても、いづことしらず。このすゝめてふ名の、しづけおかの神（江刺郡式内社鎮岡神社、旧江刺市岩谷堂餅田）の御名にいさゝか相似たり。かくいひはぶき、いひあやまれるたくひいと多し。いま陣が岡に祀れど、まことしからざるよしをいふ人あり。鎮、陣、こゑの似たればしかいふにや。もとも陣が岡もいとふりたるころ、右大将頼朝も、そこに旅寝しおましませしことなどありきと、おもひ出たり（中略）

廿六日（前略）花巻の里近うなりて、頼朝の、槻の木のもとに上箭ふたすぢを射立て、これを神に奉りて、いのり給ふたるはこゝにて、植槻といふ、今いふ筆塚ならんか（中略）

廿八日（前略）（紫波郡紫波町）人のいふ、此五郎沼は、比爪の五郎俊衡、宮古浜（宮古市）にやきたる塩をもてはこばせ、人をなみたゝせて筑（築）たる塘なり。こゝに、はなちかふ牛のたかはぎに、うるしのいたくつきて來りしを、いづこともしらざりし。はた、「旭さす夕陽かゞやくそのもとに、うるしまんばい、こがねおくおく」まで、平泉に聞しものがたりのこゝに

もせりけり。

走湯山高水寺（紫波町日誌）、むかしは郡山にありたりし。そのころ称徳天皇の建させ給ひしは、そのたけ一丈に高き観世音也。伊豆の国走湯山権現を、清衡こゝにうつし祠られたり。そのころほひは、もとも大なる仏闍たらんかし。金堂の壁の、その板十二枚をはなちたる。糾明せられしかば、そのもの、宇佐美の平治実政がつぶねたりしなど、しるし残たるふみ（吾妻鏡、文治五年九月九日）みてもしりき。此寺は今、盛岡にうつしてけるとなん（中略）

七月二日（前略）ぬまくない（岩手郡岩手町沼宮内）のこなたに、ひとつ屋のあり、そこは馬羽松（マハマツ、岩手郡岩手町御堂の北一キロ余）といへり。いにしへ義家のきみ、こゝにおもむき給ふの頃、はたごうまの料にとて糠もたまへるが、ながぢ（長路）にく（腐）ちはてて、つゆ馬のくはざれば、その名を馬はまずともいひし。その糠捨たる処を腐糠（スエヌカ）となんいひきなど、きつれかたる友のあり（後略）

九『東遊雜記』古川 辰

天明八年（1788）五月六日、幕府の巡見使に随行して江戸を出発し、横手・秋田・能代・大館・津軽を経て蝦夷地に渡り、帰路は青森・三戸・花輪・盛岡・江刺・気仙・気仙沼・千厩・平泉・達谷を廻り、一関・金成を経て十月十八日江戸へ帰るまでの日記。古川辰は備中出身の地理学者・蘭医、字は子曜、号は古松軒（『東洋文庫』27 東遊雜記1973平凡社発行より）。「巻之九 前略」九月十八日 気仙沼御発駕、五里津谷（宮城県本吉郡本吉町）（中略）津谷村は少しき町にて、この所に安養山浄勝寺という禅院あり、佐藤兄弟の墓ならびに木像を安置す。像は甲冑を着し、床几に腰を掛けし体なり。至つてよき作と見えて、生けるがごとくにして、古を思い出して哀れなり。五りにて法名を彫り付けたり。

吉祥院殿八遇次信大禅門 文治元（1185）乙巳二月十九日

清光院殿勝忠信大禅門 文治二（1186）丙午九月二十五日

予按ずるに、兄弟ゆかりの人、この地にありて建てしものなるべし（中略）二十日 千厩（東磐井郡千厩町）御発駕、三里松川（同日東山町）、一里中尊寺（西磐井郡平泉町）の坊中に止宿（中略）

中尊寺は国の中央なるを以て中尊寺と称せしと、案内の者申し上げしことなり。関山中尊寺というは、一山の惣名にして、寺院多し。御領主より三十石、五十石ずつの食地を寄付し給うなり。古よりも少しき堂塔ありしを、藤原清衡、鎮守府將軍となりて、基衡・秀衡父子三代の間に堂坊舎を建立せしものにて、世に知るごとくなりしものと、土人のいい伝うことなり。今は昔時にかわりて、大いに衰えしと見えたり。

中尊寺より乾にあたって、はるかに駒方嶽見ゆ。衣が滝は中尊寺より西にあたりて見えず。滝の傍に慈覚大師衣をぬぎ給う所というあり。これより衣川と称す。

天喜康平ごころ、源頼義・義家、安倍貞任・宗任追伐の陣場となし給う所を陣場といい、また張山（はりやま）という、二カ所の地名あり。

金売吉次が屋鋪跡を長者ガ原という、今礎石残る。安倍頼時が後見たりし成道琵琶の柵いまだ詳かならず。宮（官）照の小松ガ館いまだ詳かならず。

高館より中尊寺まで五町、土人高館を判官館と称す。高さおよそ一丈ばかり、東の方は北上川に臨みて二丈余、嶮岨なり。南北一町余、東西三十間ばかり。

柳御所、加羅楽の御所と称する所、平地にして松林あり。予按ずるに、高館・柳御所・加羅楽御所・右三カ所は、古は一廓中の名なるべし。南北五町内、東西二丁ばかり。

衣川みぎでに寄て立浪はきしの松が根洗うふなりけり 西行

むかしみし関守みれば老にけり年の行をばえやはとゞめぬ重行^{じゆうぎやう}
みちのくのたはしね山のさくら花よし野の外にかゝるべしとは

袂よりおつる涙はみちのくのころも川とぞ云ふべかりける

関山中尊寺、仁明天皇御宇嘉祥三年（850）庚午、慈覚大師の開
基なり。寺院諸堂数多あり。

中尊寺はたびたびの回祿によりて、光り堂・経堂のみを残し、何となく古を思うの情あり。光り堂は、金色堂と称して、天仁二己丑^{てんじにきうし}の年（1109）、清衡の建立、堂中ごとく金箔をおして金色とせし堂ゆえに右の名とせるが、星霜つもりて今ようようかしここに金色残れり。予委しく堂の内外を見しに、皆みなあら布をまき、その上を黒漆を以て厚く黒く塗りて、そのうえに金箔を付けしものなり。内は三壇となして金の捲柱を壇ごとに立て、上壇に阿弥陀如来をはじめ数多の仏を並べ、左右の中壇には広目・增長の二天を安じ、すべて十余体の仏あり、中壇の内清衡の棺あり。大治元丙午^{たいじげんひょうま}（1124）七月十七日卒。基衡の棺についての記載はない）右壇の内秀衡の棺あり。文治三丁未^{ぶんじさんていみ}（1187）十二月二十八日卒。秀衡の棺の側に、和泉三郎忠衡の首桶あり。清衡の太刀二尺余、基衡の太刀一尺六寸余、秀衡の太刀一尺六寸余、柄に少し金具見ゆる。銘もあるべきながら、ことごとく錆び朽ちて知れず。秀衡の嫡男泰衡、父の命に背き義経を討つ時、忠衡、兄の泰衡を固く諫むるゆえ、泰衡いかり忠衡を殺害す。時に忠衡二十三歳、この一事は普く世に知ることなり。今目前に忠衡の首桶を見て、その忠孝に感じ、覚え落涙せしなり。忠衡わずか二十三歳、その名のかんばしきこと、幾万歳限るべからず。土たる人思ふべし。

土人のいい伝えに、昔時当山金色寺の住僧に愚僧あり、清衡三代の墳には数多の黄金を納めしと聞きて、今一山の寺院衰廢に及べり、墳中の黄金を鑿り出して、その金を以再興せば、清衡三代の心にも叶うべしとて、大勢を集めて墳を発し、棺を出し、ふたを開き見しに各おの束帯せし姿あり

ありとして生けるがごとし。かの僧大いに驚きおそれて、とやせんかくやと走りめぐるうちに、右の姿雪仏（雪をかためてつくった仏像）のきゆる如く消えうせて白骨となり、それよりかの僧は狂乱して死す。棺は元のごとくにして金色堂に納め、今のごとしといえり。時代も詳かならず、土人のいい伝えのみのことにてまた選びがたし。宝物は限りもなきことにて、仏家の説にて妙々不思議の作多く、一山第一の重宝と称するものには、天台大師の絵像を作布に画きしあり。その作布というもの、世に珍しき古物と見えしことなり。書には巨勢^{こせ}の金岡^{かなおか}以来の懸けもの、この外清衡三代の奉納の奇物、蛇の齒、水火の玉などと称していろいろの物を御巡見使御一覽に入れしこと、数多なることゆえにここに略しぬ。

康永二年（1343）の銘ある大いなる鐘あり。形も一風ありて珍しく思いしことなり。愛宕の宮というに大天狗ならびに弁慶の像あり、作者知れず。弁慶の像六尺二寸、古の名人の作と思われて、世にある弁慶の画像とは違いて、威あつて猛からざるの像なり。しかれどもたびたび再興せしと見えて、彩色せし所の新しく、むかしの像ならばなお宜しかるべし。この外弁慶護持の仏とて古仏もありしなり。桜川と称せるは北上川をいうなり。昔時束稲山に続きて桜樹繁茂せしころ名付けしことなりと、土人の物がたりなり。中尊寺のことは東鑑などに記しある事跡多く、ことながく書きつけがたく、ここに予が見聞せしのみを記して大いに略せるものなり。衣の里、ひら泉、この辺すべての名なり。

春過て夏のひとへになりながら衣の里は名こそかわらぬ

堯（意）尊法師

もろともにたたまし物を陸奥の衣の関をよそにきくかな 詞花和泉式部
散りかゝる紅葉の錦うへに着て衣の関を越ゆる旅人 土御門内大臣
さくら色に四方の山風染にけり衣の関の春のあけぼの 中納言定家
衣川見なれし人のわかれには袂までこそ浪はたちけれ 新古今源重之

浅からず思ひ染てし衣川かゝる瀬にこそ袖はぬれけれ 新拾遺清原元輔
人しれず音をのみなけは衣川袖のしからみせかぬ日もなき

法性寺入道関白家三河

行人も得そ過ぎやらぬ吹かへす衣の関の夜半の嵐に 従三位為子

わぎも子が衣の里の梅の花さぞ紅の色に咲らん 中務卿御子

きのふたちけふ来てみれば衣川すそのほころびさけのぼるらん よみ人しらず

予この所の地理を見て、つらつら古を按ずるに、頼義父子安倍党を征伐の時、貞任・宗任の籠城して挑み戦いし衣の館・衣の柵と称せしは、今の中尊寺の山なるべし。後は大山連々として、麓に北上の大河流れ、西北より衣川めぐりて、東にて北上川に入り一流れとなり、要害堅固の地なり。すでに落城して貞任北に走る、義家逃ぐるを追い給い、「一衣の柵はほころびにけり」と、歌の下の句をよみかけ給いしかば、貞任駒の頭をかえし、「年を経し糸の乱れのくるしさに」と、かくよみしもの所にやあるらん。

軍書などに記しある地名を油断なく尋ねしに、年ふりまたは辺鄙なるゆえに、土人地名もうしない詳かならず。予が考えを書き加うものなり。強いて信ずべからず。

藤原の清衡は、荒川太郎武貞の猶子なり。武衡・家衡謀叛せし時、義家に属して軍功あるによつて、鎮守府將軍に任じ、奥羽の二州を領す。その子基衡が子を秀衡と称す。三代およそ九十年、大いに繁昌し、今の平泉村に居住せり。そのころ奥の御館、奥の御所といしことなり。このことは世に知ることゆえに略す。予按ずるに、清衡この所に館をうつし、衣の柵を以て墳墓の地とし、寺院を建立せしものなるべし。中尊寺縁起には、仁明天皇の御宇、慈覚大師の開基とあれども詳かならず。定めて少しき堂塔などのありしことなるべし。要害の地なるを以て安倍党の柵とし、衣川・衣の関の名によりて、衣の館とも称し、安倍党滅亡の後に清衡今の柳の御

所と加羅樂の御所の地に館をうつしてより、中尊寺古跡所なるを以て大いに堂塔を建立し、食地を寄付し、墳墓の地とせしより以来、繁昌せしものとおもわれ侍ることなり。すべて縁起などと称せる記には、仏家の説を加えて、虚談ままだし。信じ難し。走湯の権現と称せる神社、祭神清衡と奥州名所記という写本に見えたり。このことを土人に尋ねしに知れず。予按ずるに、新山権現のことなるべし。

高館（土人は判官館というなり、奥州にては館をタチといえり）大概図の如し（原本に凶失）。秀衡、義経をこの館に請じ参らす。秀衡の子泰衡、頼朝にすかされて義経を討つ節、郎等をして敵をふせぎ、今の義経堂の所において妻子を害し、義経自殺し給う。時に三十一歳。

土人いい伝う。義経及び従者高館にまします時は、山に狩し、北上川に釣し給う。万民までもなれなじみて、義経の仁心に和す。泰衡これをいみそねむの折から、鎌倉より義経を討つべしと下知あり。泰衡幸いとして父命にそむき、義経を初め、都より付き従いし人は一人も残りなく、この所においてことごとく殺害す。国民これをかなしみ、泰衡が不孝不義をくみて国乱せんとす。頼朝これまた幸いとし給い、急に泰衡を征伐し給う。数日ならずして泰衡亡びぬ。この後にこの辺の百姓、義経のためとて小堂を建立し、木像を安置して、今において祭絶え申さずと、案内の者より申し上げしことなり。今ある義経堂方一間半、義経甲冑を着し床几に腰を懸けい給う木像あり、長さ三尺ばかり。ある書に、高館は高館前民部大輔基成といし人の旧館なり、基成といしは平治の兵乱に張本なりし右衛門督信頼の舎兄にて、信頼謀叛のことによつて奥州に配流せらる、よつて高館におらしむとあり。輝井の陣場、白馬城、雲白の館、掌陣場と名所記にはあれども、その地定かならず。

卷之十

二十日中尊寺坊中に止宿し、二十一日発足、直に街道筋を行けば一の関

へ三里少し余り、達谷村へ二里余、達谷村より一の関へ二里半。

毛越寺へ中尊寺より十七町、開基建立ともに中尊寺と同じ。今は大いに衰え昔のかたなし。この事跡東鑑を見るべし。野中に三間四面の大日堂あり。御巡見所なり、宝物品じなあり。中に左に図せることきの**鉄塔**あり（原本に図欠）出家のいうは経塔といえども、その形解し難き仏器にして、名を知る人なし。鉄にして高さ二尺七、八寸、丸さ七尺廻り、下の座をとれば底なく、またふたもなし。わずかに銘の見ゆる所あれども、悉く腐りて文字の形見えず。「**文年**」の二字明らかなり。定めて年号なるべし。この所より少し行きて**大阿弥陀堂**という御巡見所あり。古は一境内と見ゆる地なり。

これより西に、**錦戸太郎**の居城せしという旧地あり。奥羽名勝記という書に、馬取沼と称せるを記し、錦戸太郎国衡が原よし山（厚かし山？）の柵破るるによりて、羽州へ落ち行かんと思いて、高館黒と称せる名馬に打ち乗り、この地を過る。三浦の義盛が射る矢、内甲に当りてこの沼に落ち入る。畠山重忠が郎等の大串次郎、沼に走り入りて国衡が首を取り、高館黒の馬にまたがりて陣中へ帰り、これよりしてこの沼を馬取沼（宮城県柴田郡大河原町、周囲1.5丁）と称す。予この沼の地を尋ねしに知る人なし。おいおい奥州へ下る人吟味あるべし。

その外所どころに古城跡あるゆえに、案内の者へ尋ね聞くに、天文・元龜・天正年中（16世紀前半〜末）の城主は知れども、頼義前九年の合戦、頼朝泰衡征伐の事跡、秀衡時代のことは、さらに知る者なし。

奥州名勝記・同名所記、この外板本に記せし事跡の地、みなみな委しからず。和漢三才図会などに記しある図、名所事跡のことは、埒もなきこと数多にて、大違いあり。晰しを伝えて記せしものなるべし。信ずべからず。

磐井郡達谷村（東西三十七、八町の村にて、農家多し）**山王窟** 中尊寺より二里余といえども一里半ばかり、往來の街道よりは一里二十四町の寄

りなり。山王窟と称せる所は**棧**作りの堂にして、数百丈の巖石に片ひさしにして作り建てしものにて、およそ高さ三丈余、東西八間、南北四間にて、東西よりはしこをかけて堂に登る。堂中には毘沙門の像あり。長さ九尺、古仏と見えて殊勝の木像なり。その外には百体の長さ一尺ばかり、二尺ばかりの毘沙門あり。別当僧のいう、慈覚大師一刀三礼の作仏といえり。何国にても仏家の常にて、一刀三礼の仏多し、解しがたきことなり。

窟の扉をひらき見れば、洞穴の深さ六、七尺、東西六、七間と見ゆ。いい伝う、古この所に**悪路王**、**赤頭王**などいし溢れ者住して国民をなやます。左近衛上総介鎮守府將軍利仁（田村丸のことなり）当国征伐の時に、溢れ者どもを召し捕り給い、牢獄ありし洞穴といえり。また大竹丸と称せし悪鬼、この穴に住せしを、慈覚大師法力を以て降伏ありし旧地ともいえり。

姫待の滝と称せるは景色よく、滝のまようおもしろき所なり。土人のいう、大竹丸といし鬼、この滝の傍に隠れいて、姫を取りしゆえに、姫待の滝と称し侍るとなり。何れも埒もなきいい伝えならずや。

堂中には毘沙門天と記せし大額かかれり。筆者知れず。能書と見えぬ。外に多門（閨）天と記せし額を掛けあり。

堂より西の方**数百丈の岩石**に、長さ一丈余の**大日如来**を彫刻してあり。別当僧のいう。源の頼義、矢の根にてほり付け給いしともいう、また義経の作ともいう。何れにしてもむつかしき所に、大いなる仏をねんごろに彫刻せしものなり。

小高き山手に**不動堂**あり。たけ五尺ばかりの不動尊の木像あり。至つて古仏にて一風ある雅仏にて、すべて殊勝に見えしなり。

いろいろさまざまの宝物の中に**鬼の歯**というものあり。長さ一寸七、八分、色は黒き所もあり、白き所もあり、至つて重く鉄の如く、図の如く肉付きありて、（原本に図欠、歯の先にはおのおの穴あり。大小二つありしなり。また蛇の奥歯はおよそ角にして二寸ばかり、重きこと鉄の如し、蛇の

牙という。長さ三寸余、横三寸五分余、天狗の爪と称せるものの大いなるものなり。色青く肉付きの所白し、右の品解しがたきものなり。

姫待の飛泉、桂(蔓)石及び山王窟の図左に出す(原本に図欠)。

桂石と称せるは大いなる石なり。今傍に桂の大樹枯木となる。昔時この桂繁茂して、枝葉岩を覆い隠すゆえに桂石と称す。これより姫待の滝へ一町ばかり二の滝二段に落つる。高さ上の飛水六、七尺、下三尺ばかり至つて急流の川ゆえ滝水の勢い強く水煙のちる所十間余、勝景なり。この川の流れを太田川という。土人は達谷川とも称す。東に流るるなり。水底は畳を布きし如く一面の石にて土砂ある所稀にて清き流れり。少しき川なれども鮭・鱒・鯉・鮒・鰻・鮠・イワナ・蟹、北上川よりのぼるゆえに所どころに梁をかけて右の魚を取るなり。この川山王窟より南の方を流るる谷川なり。別当は眞鏡山西光寺という。天台宗にて妻帯の僧なり。古は寺院はかくのごとき例多し(中略)

(二十三日) (前略) 金成の町より二十余町南、この処につくも橋と称す土橋旧跡なり。予按ずるに、古の古道なり。橋の傍に桜清水という名水あり。

陸奥の勢はみかたにつくも橋渡してかけん泰衡の首 頼朝卿

案内の者のいうなり。泰衡の首塚には無名のしるし石あり(後略)

十 『北行日記』高山彦九郎

寛政二年(1790)九月、盛岡藩領浅虫より七戸・五戸を迂回し、八戸(以上青森県・久慈・一戸(以上岩手県)・大湯を経て鹿角(以上秋田県)に出て、田山(二戸郡安代町)より南下し十月盛岡へ、七日平泉より母体(胆沢郡前沢町)・猿沢(東磐井郡大東町)・薄衣(同川崎村)・金沢(西磐井郡花泉町)を経て金成(宮城県栗原郡)へ。高山彦九郎は上野の人、字は仲繩、正之。尊王論を唱えた寛政の三奇人の一(『日本庶民生活史料集成 第三巻 探検・紀行・地誌

東国篇 1969 三一書房発行より)。

〔十月六日〕(前略) 水澤より東の方小道二十里正法寺有り、其の東小道五里に鳥ノ海村(東磐井郡大東町)西木坂、是れ安倍頼時流矢に當りたる所也、岩井郡の内也(中略)

七日(前略) 前澤宿を出つ。白鳥村是れより小山を二つ越へて衣川の瀬原を経て圪橋三四十間なるを南へ渡る是れ衣川也。渡りて中尊寺村是れ迄小道八里坤に来る。左り三丁斗りに辦慶立往生の所今は畑となる、世に逆水に流るゝといへとも流れ東へ行くと問へは辦慶戦死の時に逆流せしとて辦慶程のものも逆流せしといふ事也。

其れより巽六七丁北上川を東に渡りて衣ノ關の跡有り、往古は北上川衣ノ關の東を流れて東山へ通ぜしよし。

右へ登りて薬師堂有り碑文あり、大日堂鐘堂彌陀堂辦天堂釋迦堂赤堂經堂光堂、光堂に清衡基衡秀衡三代の遺骨納めたる所、開帳十三文角錢にてはならず圓錢ならでは叶はずとて開ラかず、五間四面也。

辦慶堂を左にして下りて櫻川橋五六間、光堂別當中尊寺都て十八ヶ寺、古は三百ヶ寺天台宗也、五貫文の除地也。和泉か城は衣川の橋より西小道四里斗小山也、今は畑となり山となるといふ。櫻川に於て案内源藏に錢を與へて別れて櫻川の橋を渡り坂を上りて高館村に至る。左り壹丁餘上りて義經堂有り、衣川北上川目下に見ゆる。神ン山ン權現堂は義經堂よりひくき所に立つ。南三丁斗り柳の御所とて田畑となり有り、秀衡の館の跡と傳ふ、猫釜淵の跡とて義經堂より異壹丁斗に田畑となり有り。

義經堂より二丁斗西南に金鷄山とて小山有り泰衡が金の鶏を埋めたる所と傳ふ。義經堂の山を判官館といふ高館の城跡也と傳ふ。歸へりて中尊寺村案内者源藏所に乞ふて宿す。麥飯を出だす、東山郷長部村久五郎など同宿す、蘆幸七の事を知りて語り。瀬原に金命丸とて賣藥有り食傷二日醉鶴(霍)亂などよろしき能書也、名物とす。衣川の橋を堺として北は下伊

澤郡、南中尊寺村より岩井郡也。今夜雪降る。

衣川にてよめる

正之

歌夏立て冬にぞきつる衣川風寒みこをるなりけり

八日 雪降る。光堂を見る、東向也三間四面翰堂にて五間四面、來光柱は七寶莊嚴の卷柱也。本尊彌陀の下三代の遺骨あり。泉三郎忠衡の首も桶に入て有り、圓錢十三文僧に與へて狂歌して寄す。

光堂は七寶莊嚴の柱と聞けともふるびたれば光らず

旅客まさゆき

光堂何か光と思ひしに錢こそひかる物にそ有ける。

中尊寺へ參らせけるとぞ。歸へりて源藏所に休ひ侍る。金命丸の調合の家小野寺二左衛門なる人濁酒を振舞ける。衣川の橋と櫻川の間龜井六郎鈴木兄弟金平の墓皆ナしるしに松あり。前澤宿より山ノ目宿へは二十四里の馬尺、山ノ目より一の關へ小道五里一ノ關より有壁へ小道十五里有壁より神成りへ小道十五里といふ。達谷窟と志し行く、左り鈴木兄弟の墓松二本有り、金平の墓龜井六郎共に松を墓印しとす。判官館より右へ入りて多寶院なる山伏へ乞ふて案内せしむ。右に金鷄山梵字の池鈴澤の池鶴が池也。基衝が室宗任女墓とてあり。車宿り左り上(常)行堂口口辦天とつこ水見ゆ。圓隆寺の跡有り基衝の建立のよし、講堂嘉祥寺の跡皆石ずゑありぬ。南大門の跡黒獵(臘)石ありぬ。南大門の跡より南の方平泉の城跡六七丁に見ゆ平城也、八方八ツ花形と土俗唱へ侍る。平泉村を過ぎ達谷村へ入る。左り川瀧有り姫待が瀧と號す、惡露王か其姫を待ちたる所と傳ふ。達谷か窟巽に向ふ、懸け作りなる毘沙門堂あり、前に辦天こなたに不動堂有り、別當西光寺國印三貫文附く、田村將軍爰にて惡露王を滅ぼす、中尊寺村より小道十二里坤に來る。達谷窟岸壁高さ十丈横五十間斗り岩井川を左にして爰に來る。姫待ちか瀧も岩井川の中也、下流は一ノ關へ出る。西光寺に休ふ、婦人子を卸し乳して居る、後に尋ぬるに住持が子にてあり

ぬとぞ。中尊寺仲十八寺も皆ナ婦を養ふ是れを土俗おくりさまと稱するとぞ、僧として婦を養ひ子を持事多フし、其の子を弟子の如くして寺を讓るもまゝ有るよし。歸へるにも岩井川を右にして高館へ出で戌の刻に及んで中尊寺村源藏所へ歸へる。雪益々積りてそありける。今夜雪の故に寒くて目覺め詞花集和泉式部歌に、

諸共にたたましものをみちのくの衣の關をよそに聞哉

とあるを思ひ出でよめる、

正之

歌 よそならず身にかけきぬる衣川折しも雪ぞ寒けかりける

年を経ていともさかしき川波に衣の關もよそになりける

是れは北上川の瀬移りて今は衣ノ關の西を流るゝの故にかくぞ。辦慶松は櫻川茶店の側らにあり腰懸たる松ともいひまた墓なりとも傳ふ詳かならず、是れも道の左り也。鈴木兄弟金平龜井か墓より辦慶松と續く皆ナ近所也。山伏多寶院か近所にて田中にかめの内砂金にて美玉をつめたるを昔年此所のもの堀(掘)り出だし候へ獻んぜしとぞ、夜光の玉と號するのよし、多寶院語れり。中尊寺村も平泉の内也。

九日 晴る。宿賃として琥珀の緒しめを源藏に遣はす。貞任が衣の館は衣川の橋より川上小道十里斗西の方に小山になりてあり。義家の居られし所も其れより小道壹里斗南に小山にて有り、八幡の社有りとぞ。此所より貞任逃げて前澤の西北上か野に籠る、往來の右の方にあり、徳岡村の内也といふ。秀衝城廓北は折井南は清水の大門東は東山の内なる千馬屋西は達谷を限りとすと土俗傳ふ、南北小道五十里斗といふ。折井は前澤の北小道十里にあり、清水の大門は一ノ關より小道二十里東南也、千馬屋は山ノ目より小道四十五里東也、達谷は判官館より西十里にあり。中尊寺國印五貫文十八ヶ寺合せて三十貫の國印のよし。中尊寺村を立つ。衣川の橋を渡りて次に圪橋を渡り右の細道へ入り徳澤川を一本橋にて渡

る。右に辨慶戦死の所の畑を望みて北上川の邊に出つ、鮭を捕る為めに漁人共小屋懸けして居る。忠五郎を尋ぬるに居らず、昨日予に約して船を越し進まずべしと言ひしに約違ふは飲みての故なるべし、よろしくいひてよと漁人等に言を残し渡口に及んで船を呼び渡す。西に須川か岳乾に膽澤か岳北に駒か岳雪白々と見ゆ、是れ迄東北小道壹里餘。渡りて東山郷岩井郡長部村古來は納メ村と書せりといふ、秀衡時代に佛經を納めたる故に此號ありとぞ（中略）長部と赤生津の間に東稻山とて名所あり。

西行の歌

みちのくのたばしね山の櫻花吉野の外にかゝるへしとは
となん（中略）

十一日（中略）金賣吉次が屋敷跡今の衣川村瀬原の西にあり溝石鐵くず残る（中略）

十二日 曇る。前澤に大櫻とて十二尋なるあり。中尊寺うば杉枯れたれ共葉もありといふ、大木也（中略）

十四日（中略）田河津（旧東磐井郡東山町）より岩井郡東山郷也、是より北小道四十二里江刺郡岩井堂（旧江刺郡岩谷堂）也。其れより東小道四里斗に杉山といふ所有り安倍頼時か城跡也といへり。杉山より南小道四里斗に田谷村（同愛宕村）劔が淵とて池有り、是れより出る劔一明院なる山伏の所に賣者となる。是れ頼時が義家へ打付けたりし劔也とぞ、一つは池中に有りて出でずと傳ふ（中略）

十五日（前略）是れより鳥の海村（旧東磐井郡大東町）也。川を渡る鳥の海川といふ。細越へ坂を經る（中略）是れより南の方大道壹里に妙見の社有り、是れより十丁斗り東に當り西館と號し鳥海三郎宗任が館の跡と傳ふる所あり、其れより良の方十八丁餘りに八幡の宮あり小社也、十年斗り以前大風にてけやきの大なるを吹折りつるに枯れて枯木の内に矢の根多ク出つ、是れを取て砥に懸けて用れは刺（剃）刀の如く切れたり、是れ八幡八郎義

家の陣所にて有りつるを安倍か兵共多クいかけたる矢なるへしといへり。四丈五六尺の廻りし、頼時の流矢に當りたる所といふ傳はあらず（中略）良八丁斗に宗任が館の跡西館とて小山あり、東に當りて鳥の海彌三郎か館の跡とて山有り（中略）

十七日（前略）（旧西磐井郡花泉町金澤）町の出口圪橋を渡る、二十間斗り。渡りて清水、右の方清水の大門の跡秀衡の門の跡と傳ふ、今は金澤の内となる。同しく右に二王門原とてあり、秀衡の時に二王の立ちたる所と傳ふ（中略）

十八日（前略）金成より西小道十里斗りに平形村（旧栗原郡金成町）といへる有り。櫻清水とて清水あり其所につくも橋とて頼朝の奥州伐の時につくも草を橋として責め入りたる古跡、

梶原か歌

陸奥の勢は味方につくも橋渡して懸けん安（泰）衡か首とぞ、東鑑に載す。つくも草はサンレウといへる草をいふ、菖蒲に似たるものとぞ。金成町の北十七丁斗り畑村に金賣吉次が親炭焼藤太夫婦の墓有り、母を阿古の前といふ。町の東に館三つ有り西館東館南館といふ、吉次吉内吉六三人の兄弟等が居りし所と傳ふ。橋次及び藤太が古跡多し（中略）

梨崎村（同金成町）八幡の宮の内に姉葉の枯木有り。異の方壹丁斗り姉齒の松二本也二かいに満たず。其邊義經腰懸石硯か池とてあり、池の大差三間斗り、澤邊より姉齒の松まで小道巳の方二里半の所也（以下伝説を紹介しているが省略）

大道より二三丁こなた姉齒村（同金成町）の中にて右の方壹丈斗り高き所より清水岩に添ふて流れ下る、鷹の羽清水といふ、義經奥州下の時に鷹の餌食ひせられし所と傳へたり（中略）

十九日 晴る。宮野宿（同築館町）を早に立つ、留場人家入口右に明神松と

て有り、昔は義經腰懸松といひしを吉村の時に明神松井と稱するやうに命ありしよし（中略）

二十八日（前略）坂を下りて鹽竈の町（宮城県塩釜市）也。入口に正一位鹽竈大明神左に有り袴を着て參詣す。石鳥居を入り石階を壹丁斗登る隨身門樓門也。左の方奉寄進文治三年七月十日和泉三郎忠衡頓首と書き上げ銘の燈籠六尺斗の廻りなる有り。其邊神庫有り（中略）

十一月四日（前略）（船迫）此所右に岩山あり憚りの關の跡と傳ふ、右の山を葦髮山といふ。山陰に照井太郎が墓有り、左の山を篠が館といふ。船迫より壹里十二丁四十六間坤に來りて大川原驛（旧宮城県柴田郡大河原町）。篠が館の城主柴田の四郎也、秀衡が子也といふ（中略）

左り白石川を越へて小下倉村（白石市白川）といへるに義經の乘られし太夫黒の馬出でし所とて田の中に大石ありといふ、實は田鶴黒也と土俗の説也、馬と鶴と共に遊びたるにより此名起るといふ（中略）

（齋川驛、白石市齋川）少し登りて左りに越王堂繼信忠信兄弟の妻の木像也とて有り。右に鬼塚とて塚の松の一木有り。鬼のすり臼とて左りの山に大石有りて人八人斗ならでは動かぬ程なる有りとぞ。少し登りてあぶみすり石とて一騎打の難所有り、是れも登りて道中に石有り。牛馬沼を右に見て坂を経て越川驛也、齋川より南壹里半、越川町中程右の方番所有り。坂を経て十丁斗り仙臺領と伊達領の境有り、是れ迄松並木也、南部森岡より爰迄續けり。此所左りしたひもの關の跡あり。あつかし山も此續也。坂を下り行きて貝田驛也。越河より坤十八丁の馬尺也。猶下り行き原ノ町とて人家有り。伊達の丸山を右にして下る是れを大木戸と號す。異の方五里斗に靈山高く見ゆ、是れ顯家の興られし山也。下りて右二丁斗に義經腰懸松辦慶硯石の下に母衣懸松といふも有り（後略）

十一 『東遊記』橘 南谿

寛政七年（1795）開板、天明四年（1784）京都から江戸へ行き、東海・東山・北陸各地を旅し、そこで遭遇した諸国の奇事奇聞・風俗・産物などを記録したもの。盛岡藩の絵暦が広く知られるようになったのはこの東遊記によるところ大である。南谿は京都の人で醫を業とした。名は春暉、字は惠風、南谿または梅仙と号した（『東洋文庫248 東西遊記1』1974 平凡社発行より）。

「（東遊記 卷之二 一六 塩竈）
奥州仙台の東北四五里に、塩竈という町あり。塩竈明神を祭る地故、其所の名とす。甚だ繁花の地にて、家数も千軒に余り、遊女などもありて、仙台辺の人の遊興の場所なり。海に添う地ゆえ、船も入りて殊に賑か也。塩竈明神の宮居甚だ広大美麗にして、去年京を出でしよりいまだ見ざる所也。一国の人甚だ尊信して、月参或は講参り扨とて、九州の人の宰府の天神に詣するがごとし。其ゆえに、旅館なども大にして又多し。酒、魚物に至るまで富めり。

此社の門を入りて、左の方に鉄の燈籠あり。網の蓋ありて、其上に九輪のごときものあり。塔に似たり。台も鉄にて作れり。此台と火袋の所鉄にて、真の古物と見ゆ。蓋より以上は新物なり。扨、火袋の前面の上に鑄付けたる和泉三郎忠衡敬白の文字あり。秀衡、鎮守府將軍たりし時、其子の三郎寄附せしと見えたり。其時の倂見えて、むかし忍ばしくおもわる。此燈籠の前に、杉板に書付けたる仮名文章、此燈籠の事をしるせるを懸けたり。召具せし養軒讀みて、「扨もよき文章也。東北国にて此頃見及ばざる事也」といひえ、大いに感ず。いかなることを書けると讀みて見るに、芭蕉翁の奥の細道といえる書に出でたる此燈籠の事書ける文章也。養軒は和文の事も知らず、俳諧の道はさらなり、芭蕉といえる名をだに覚えぬ程のものなるに、よきものは誰が目にもよきと見ゆ（後略）」

「（東遊記 卷之五末 三五 平泉

奥州平泉はむかし奥羽二州の大守、鎮守府將軍秀衡父祖三代居住の古城跡なり。仙台の城下より行程二十四里余北の方にして、前に北上川、衣川を受け、うしろは高山幾重ともなく重なり、実に要害の地也。秀衡、清衡建立せる中尊寺今に存在して、昔の佛まのあたりに見えてあわれ也。

此山を関山という。麓の街道に昔関所ありて、衣が関と名付く。此故に、此山を関山といいて、中尊寺の山号とせり。此近辺の里を、今にても上衣、下衣といいて、民家あり。衣という里に流るる川ゆえに衣川と名付け、衣の里の関所ゆえ衣の関ともいうなるべし。安倍貞任が籠りし衣川の城は此中尊寺よりは一二里ばかりも山に入りてあり。又義経の住み給いし高館は直に此関山の下にて、纒かに街道筋へだて中尊寺より五丁に近し。高館の跡は甚だ狭く纒かの所にて、中々当今の城郭杯のごとき跡とは見えず。只暫時義経の住みし屋鋪の跡というべし。今は草木生茂りて芭蕉の発句のごとし。此あたりは亀井六郎が塚、鈴木の子郎が塚等あり。皆古松一本ずつありて明白也。弁慶が古跡もあり。又中尊寺の鎮守白山宮のうしろより少し西へ行けば物見の亭の古跡あり。此所より見おろしよろし。向うに見ゆる山を陣場張山と云う、二つの地名となれり。是は頼義義家、貞任宗任追伐の時、陣を張れる所と云う。又それより手前に見ゆる野を長者が原と云う。金売吉次信高が屋鋪の跡とて、今に郭石少し残り。又東北の方に高く見ゆるはたばしね山也。西行の「聞きもせずたばしね山の桜花吉野の外にかかるべし」とよめる山なり。むかしは桜多かりしが、今にては歌のごとくはあらず。余が京を出ずる時、佐々木長春、「陸奥にはたばしね山とて、桜多き山有り」といえり。「花の比ならば、必ず尋ねて見るべし」とて和歌などおくられぬれば、奥州の地に入りてより日々尋求めて、ようよう此所にて尋得ぬれど、花無くて本意なし。されど一しおに昔思われて、例の腰折など綴る。それより中尊寺に詣て諸堂巡拝す。

此中尊寺は弘台寿院とも云いて、東叡山の末寺、開基は慈覚大師にして、

其後年歴て鎮守府將軍藤原清衡中興なり。清衡は秀衡の祖父にして、此時既に奥羽二州の太守、勢殊に盛なりしかば、此中尊寺を中興して、堂塔四十余宇、禅坊三百余宇を建立すと也。其結構金銀珠玉をちらばめて、全盛を尽くせり。此事、堀河院、鳥羽院等の叡聴に達し、遂に大治三年丙午（1128）、按察使中納言顯隆卿を勅使として此国に下給い、御願文の草稿は右京大夫敦光朝臣、清書は冷泉中納言朝隆卿にて、今に此寺の什物とす。猶此外に右大将頼朝の御教書、又北条相模守貞時、北畠中納言顯家、浅野弾正少弼長政、豊臣関白秀次公等の文書数数有りと也。みだりに見る事を許さず。扱右の堂塔伽藍、建武四年（1337）回祿して、纒かに経蔵一ヶ所、金色堂一宇を残せり。是も星霜久敷移り、段々破壊に及びしを、百八十余年の後に至り、正応元年（1288）鎌倉將軍惟康親王歎き思召し、北条貞時に命じ、此二つの堂に又別に新たに覆い堂を造り、風雨を避け、修嘗を加えしめ給う。其後今に至り、時の国主より代々覆い堂を修理して風雨を防ぐ。此ゆえに、今日に至り清衡建立の金色堂、並びに経蔵殿然と残りて、むかしの佛有り、就中、金色堂は殊の外美麗にして、日光山の外世間此に比すべきもの稀也。ことごとく布ぎせにして厚く漆ぬり、其上に金箔を押し、堂中一様の金色なり。長押の地紋には、螺鈿、珠玉をちりばめ、中壇四隅の柱は七宝を以て荘嚴せり。既に五六百年を経れば、螺鈿も貝落ち、珠玉も欠損じ、金箔も斑なれど、元來結構丁寧なれば、今に猶あたりをかかやかす斗り也。中壇の上には阿弥陀、觀音、勢至等の仏像を安置し、壇中には三人の棺を納む。中は清衡、左は基衡、右は秀衡なり。秀衡の棺の側に、和泉三郎忠衡の首桶を納めて、今に祭に配す。清衡は大治元年丙午（1126）七月十七日逝去、其子基衡保元二年丁丑（1157）三月十九日逝去、其子秀衡文治三年丁未（1187）十二月廿八日逝去すと云う。此堂に納むる所の什宝数々多き中に、清衡の納めしとて紺紙に金泥銀泥にて楷書、行書ませ書の一切経あり。是は清衡存

生の時、自在坊蓮光といえる僧に命じ、一切経書写の事を司らしむ。三千日が間、能書の僧数百人を招請して供養し、是に書写せしめしと也。余も此経を拜見せしに、其書体楷法正しく、行法亦精妙にして、漢土の諸名家を集めて書かせしむるとも、中々是に勝るべからずと思う。彼時分日本にもかばかりの能書多きに、今の世に誰一人聞ゆる無きは、誠に歎息するにも余り有り。其後四海戦争の事に、穩なるいとまなく、文華地に墜ちたる故なるべし。其人の不幸ともいふべし。数多き一切経の事なれば、なるべき事なれば、一二卷ずつも世間に出だしたき事にこそ。経の箱は黒漆に螺鈿にて、経の題号をしるしたり。其箱も亦古雅甚だし。此外にも基衡納めし紺紙金泥の楷書の一切経あり。是は世間普通の経のごとし。又、秀衡納めしは宋板の折本の一切経なり。此外に玉軸の法華経壹部、小野道風の筆跡なり。是は余見ることを得ず、殊に残念なりき。又、天台大師の影像一幅、地は竹布というものにて、画は唐人にて、其名知れず、讚は顏魯公の筆という。是も当寺第一の宝物として、見ることを許さず。慈覚大師唐土より将来の物なりと云う。其外金岡の画の十三仏、牧溪の観音等、種々宝物多し。基衡も亦、最仏法に帰依し、毛越寺、円隆寺、嘉祥寺等を造立す。仏工運慶をして、丈六の薬師如来、及び十二神將、其他仏像若干を造らしめんとして、まず運慶方へ使者を遣わし贈り物す。其品、

- | | | |
|-----------|---------|-----|
| 一金百両 | 一 鷲羽 | 百尾 |
| 一七間中径の水豹皮 | 一 安達絹 | 千匹 |
| 一 希婦細布 | 一 糖(糠) | 部駿馬 |
| 式千端 | 一 信夫文字摺 | 千端 |
| 一 白布 | 三千端 | |

猶、此外に奥羽の産物珍奇を尽くして取揃え、運慶に贈る。運慶是を得て大いに悦び、又奥州の練絹を称美す。使者歸りて此由をいしかば、基衡又、練絹を三艘の船に積み、別に運慶に贈る。運慶悦び、みずから件の仏像をつくり、玉眼を入れて、三年の間に功を終り、奥州に送ると云う。

仏像に玉眼を入れる事此時より始まりと也。是等の事にも、当時平泉の盛なりし事おもいやるべし。秀衡杯の頼朝をだにあなどり居たりしもむべ也(後略)

「(東遊記 後編 卷之二) 四三 三馬屋

奥州三馬屋(旧青森県東津軽郡三厩村)は松前渡海の津にて、津軽領外が浜にありて、日本東北の限なり。むかし源義経、高館をのがれ蝦夷へ渡らんと此所迄来たり給いしに、渡るべき順風なかりしかば、数日逗留し、あまりにたえかねて所持の観音の像を海底の岩の上に置いて順風を祈りしに、忽ち風かわり恙なく松前の地に渡り給いぬ。其像今に此所の寺にありて、義経の風祈りの観音という。又波打際に大なる岩ありて馬屋のごとく、穴三つ並べり。是義経の馬を立て給いし所と也。是によりて此地を三馬屋と称するなりとぞ(後略)

十二 『松前紀行』堀田正敦

幕府の若年寄勤仕中の文化四年(1807)、松前にロシアの来航があり、その巡察使として六月二十一日江戸を発し、往復百余日、十月三日江戸に歸るまでの紀行文。正敦は仙台六代藩主宗村の第六子で、堅田侯堀田若狭守正富の嗣となり、將軍家齋に仕え、従五位摂津守となつた(仙臺叢書第六卷) 1924 仙臺叢書刊行会発行より)。

「(前略)やがて十萬坂(旧宮城県栗原郡金成町)をこえ。一の關につきぬ。こゝはわが子田村敬顯がしる所なれば。旅の宿にとひ來て。おほやけ私の事どもかたりあひつゝ、

あくるあした。道のほとりなる中尊寺にのぼる。たばしね山いと近けれど。村(叢)雲にへだて、見えみ見えみするもゆかし。昔はさくら多かりしかば。櫻山と名づけ。ふもとの流をさくら川ともいひて。よしの、外にかゝるべしとはと圓位といふ人のめでしも此のところなりとかや。今は

一木だに見えざりければ。

いにしへの名のみ流れてさくら川たゞ白雲ぞおもかげにたつ

衣川もこなたに見え。衣の關。衣の里もかしこなりと聞ゆ。藤原の秀ひらが時つくりし愛宕の社。ひかり堂など。なほやけのこれり。これより日ごと右にそふ流を北かみといふ。かの逢隈におとらずこぢたき河なり(中略)。

いしどやより郡山のあはひを。ひづめむらといふ。樋爪太郎とし衡。同五郎秀季ひら。くりや(厨川にまゐりしこと。ふるきふみにもみえたり。かれらが住みしところにやあらん。五郎が墓もかしこにありといへり(後略)。

十三 『夢ノ代』山片蟠桃

文政三年(1820)成立の教訓書、12巻。天文・地理・歴史など各分野にわたり、社会経済的な視点と徹底した合理主義的思考で貫かれている。

山片蟠桃は江戸後期の商人で思想家。播磨国印波郡の生まれ、本名長谷川有躬、通称舩屋小右衛門。大坂の豪商舩屋の別家を相続し、本家の番頭として再興に尽力した。寛政九年(1797)年三月、商用で仙台へ下り、その際に平泉他を訪れた(『日本思想体系43 富永伸基・山片蟠桃』1973 岩波書店発行より)。

「夢ノ代」地理第二(前略)

十 寛政九年癸巳ノ春、余奥州二下ル。探勝ノ暇ナシトイヘドモ、三月六日仙台ヲ発シ、多賀城趾・塩竈ヲ経テ松島ニ至ル。塩竈ヨリ松島マデ舟シテ洲々ヲメグル。其勝景イフベカラズ。瑞巖寺ハ巨刹ナリ。松島ヨリ石ノ巻ニ至リ淹留三日。寺池・一ノ関ヲ経テ山ノ目ニ至リ、十三日中尊寺ニ抵ル。曉ニ山ノ目ヲ発シ、二十町余、右に柳ノ御所アリ。(御所ノ号イカミナレ

ドモ俗語ニ從ゴフノミ。ソノ余コレニナラフ。三五町北ヲ東ニ転ジ、小丘アリ。コレ高館ノ御所ノ古跡ナリ。中段ニ新山権現アリ。ソノ上ニ物見ノ亭趾アリ。北上川其下ヲ流ル。(北上川ノ源、南部ヨリ出ル。又来神川トモ云。)東ヲミレバ高山アリ。東山ト云。古ハ東稻山ト云。西行ノ歌ニ「陸奥ノタバシネ山ノ桜花吉野ノ外ニカ、ルベシトハ」。安倍ノ頼時コノ山ニ桜樹ヲ多クウヘシヨリ、今ニ至リテサクラ多シ。北上川古ハ此山下ヲ流レシユヘ、花ノコロハ花チリタルヲ以テ桜川トモ云。コノ間ニ嘉楽ノ御所ノ跡アリ。物見ノ亭ヨリ一町バカリ山上ヲユキテ、義経ノ像アリ。甲冑ヲ帶シ胡床ニカ、ル。小祠ニ安ズ。白旗大明神ト号ス。高館ヲ下リテ本道ヘ戻リ、二三町、樹木森々、山路ハケハシ。コレ古ヘノ衣ノ関ナリ。弁慶松・鈴木松・亀井松アリ。西ニ躋リテ中尊寺アリ。弁慶堂ニ像ヲ安ズ。長六尺二寸。亀井六郎方笏アリ。高三尺バカリ、幅二尺バカリ、深サ一尺余。ミナ金物アリ。棚三段、皆両扇ナリ。ソレヨリ別当ノ宅ニ至リ客殿ニ憩フ。下シミレバ北上川東ニアリ。衣川西ヨリ流レテ北上川ヘ入ル。ソノ絶景云ベカラズ。金色堂ニ至ル。其彩色、七宝・螺鈿ヲ施シ、柱扉ミナ金箔アツシ。扉隅ノハゲメヨリコレヲミル。壇上ノ中ハ清衡、左ハ基衡、右ハ秀衡三人ノ棺ヲ収メ、泉ノ三郎の首函アリ。コノ堂古ヘハ遠キヨリ見テ光耀ス。ユヘニ俗、ヒカリ堂ト云。今朽腐ニヨリテ、外堂ヲ以テコレヲ覆フ。白山堂ノ後ニ老婆杉アリ。周廻三丈五尺、径一丈二三尺。三方ニ皮アリテ中空虚ナリ。一方ノ口ヒロシ。中ニ四五疊ヲシクベシ。二三十人ヲ入ルベシ。シカルニ枝葉繁茂ス。

ソレヨリ奥ニ物見ノ亭趾アリテ衣川ヲ見下ス。金商吉次ノ旧居、白鳥ノ柵・琵琶ノ柵ノアトアリ。琵琶(琵琶)柵ハ泉ノ城ナリ。忠衡ノ居処ナリ。巨鐘あり。龍頭ナシ。古物ナリ。

ソレヨリ衣ノ関ヘモドリテ、又西ニ転ジテ金鶏山ノ麓ヨリ、毛越寺・嘉祥寺・円隆寺ノ旧迹ヲミル。ミナ礎石アリ。コレマデラスベテ平泉ト云。

清衡ヨリ泰衡ニ至テコ、二住シ、奥羽ヲ鎮シ驕奢ヲキハム。寺塔ノサカナル、第宅ヲ御所ト称シ、平泉ヲ都ニ比シテ、東面ヲ東山トス。ソノ余ノ繁榮古ヘ二ナラブモノナシ。保元・平治ノ乱（1156・1159）ヨリ平氏熾ナリトイヘドモ、威令コ、二及バズ。ツイニ義経ヲ迎ヘテ頼朝ト争フニ至ル。ソノ威望以テミルベシ。コレヨリ達谷ノ窟・五串ノ滝ヲ見テ、山ノ目ニカヘリテ宿ス。ソノ余、奥ノ勝景アリトイヘドモコ、二略ス（後略）

十四 『筆満可勢』藤原衆秀

江戸深川仲町住の富本節の芸人繁太夫とその弟子二名の、文政十一年（1828）から天保六年（1835）までの流浪の生活を記した日記。その旅は陸奥から京都にまで及ぶが、平泉ほかは文政十一・十二年に訪れている。なお、藤原衆秀（ふじわらのもろひで）は興行上の必要から名乗った偽名で有り、繁太夫（しげだゆう）も本名であるかは不明である（『日本庶民生活史料集成 第三巻 探検・紀行・地誌 東国篇』1969年 三三書房発行より）。

「八月 廿七日 彌々此朝東藏殿宅（一関市山目）を出立する。馬貳疋馳走に出す。是より、秀衡貞任杯、古き楯跡有り。平泉村といへるに義経の像ありといへる故尋し所、百姓家にて鍵を持、少し小高所へ行。藪の中に少々の宮有り。扉をひらき拜す。鎧姿にて弓矢を持たる立姿也。近頃修復有りしと見へて、奇（綺）麗也。一、御開帳料三十文。

同所、中尊寺東谷にて、地藏院辦慶の像有り。皆言ふ、辦慶衣川にて立往生の圖を作る。丈ヶ壹丈程。七つ道具を背負い、長刀を杖につき、半眼にして是も近頃修復有りしとみえて奇麗なれとも、異（以）前が古き細工成と見へてよろし。宮の正面、義経に向ひて左りの方に、少々の岩を踏へて立居る。右の脇に、龜井六郎、片岡三郎東下りの節負來りし筈、二つ有り。

龜井の方は、梅花色鉛取（彩）て高彫有り。片岡の方、牡丹色取て是も高彫。何れも古物也。一、三十九文 御開帳料。一、六文 辦慶畫像。

又秀衡の寄（祈）願所にて、光り堂といへる有り。此所に、秀衡兄弟三人の尊骸納め有る。秀衡存生の時、金銀を盡し建たる御堂にて、金箔厚く付、光り渡りし故、月夜杯には此光北上川へうつりて魚不寄、漁師甚難澁に付、山より願ひて、下たへ引おろす。此堂年久敷故、朽はて、風雨にかける故、さや堂といへるを拵へる。十年程異前に、盜（人）來りて此箔をぬすみし故、所々取りし跡有る。

什物に、秀衡兄弟三人の太刀有り。又堂の片すみに、ちいさき釣鐘有り。むかしの棟鐘也といふ。一、三十九文 右御堂の開帳料金（中略）

十七日（盛岡にて）當所に南部富士といへる有り。巖鷲山と言って殊の外高山也。近國に山あれとも此山に不續。是をいわし山といふ。然に此山の是（絶）頂に巖鷲大明神といへる社有り。是を御いわし山と申事也。此日頂に雪降る。此山江安部（倍）貞任八幡太郎義家の攻上られし舊跡あり。此山上に茨の茂りたる所有り。此茨夥して、義家登るに難義（儀）して刀を抜きて切はらひ、尤此茨下たを向きゐたりしが、通りし道斗は皆上を向

きしといふ。今以右様也。是其節の舊跡也（中略）
（文政十二年一月）十五日（郡山、現紫波郡紫波町にて）（前略）又十六日は、木を金形チに切りてかみに包、家々え來り金を買わつせといふ。皆心持次第に錢遣る。是は秀衡時分よりの例、金賣吉次杯の舊事也（後略）

十五 『胤馬代金并往返日記』福田弥五八正名

天保四年（1833）、日光御領野州都賀郡上草久村（現栃木県鹿沼市）の福田弥五八正名が、日光奉行の命を受けて、種馬を買い付けるため、仙台藩領江刺郡岩谷堂（現岩手県奥州市岩谷堂）へ赴いた際の往復の道中記である。当時岩谷堂は、岩沼（現宮城県岩沼市）、国分町（同仙台市）とともに仙

台藩三大馬市の一として知られていた。ここには、盛岡藩よりの良馬も流入していたのであった。

福田弥五八は同村の年寄名主利左衛門の倅として年寄見習いを勤めていた時に、日光奉行に呼び出され、買付けを命ぜられたもの。なお、弥五八は狂歌をよくする文化人の、また、朝鮮ニンジンを栽培する経済人の顔も持つ、多彩な人物であった(『栃木史心会報No.23』1991発行より)。

〔往路、天保四年一月、伊具郡にて〕翌廿一日(前略)今日昼八ツ時頃より風大二出、吹雪昼中臙月夜のことし。然ル処ニ幼年の盲人三絃を携來る処戻りかたく暫く休む内ニお国ぶしという浄瑠璃をさく事を得たり。甚以変にして語るに足らず(中略)

(二月)翌二日(前略)夫より塩釜市の神社鳥居先ニ至る。夫より石雁木余程高し。但し中にて三つになり中段雁木壇数百三拾六段有之候と覺えたり。夫より随神門ニいたる。其門の額ニ、正一位塩釜神社。門を入右の方別宮と申奉る。御神ハ則塩主玉(王)子(塩土老翁、しおつちのおじ)ト申奉る由。夫より正面右宮左宮と申奉るハ香取大神宮鹿島大神宮両社相殿ニ祭り奉る由。且又鉄燈籠数多の中ニも、文治年中和泉三郎寄進の燈籠珍敷存候。道を急ぎ委敷ハ拜見不仕(中略)

翌五日(一関南方にて、前略)夫より又大成山坂ニいたる。名を十万坂という由。むかし奥州秀衡の時、鎌倉殿より十万騎の軍勢此所まで寄る。是を以名付けるとかや。此坂を越し一ノ関御城下ニ至る(中略)同宿北出口ニ橋あり、此橋を渡り農家町家引續き山ノ目宿ニ至ル(中略)

夫より名にしおふ高館麓を通り、此所ハいにしへ義経公主従共秀衡の城郭に住せし所といふ。此所を尔今判官館と申、且又東ノ方ニ見る山を桜山といへ(ひ)此山の中ニ千厩と申所有。是ハ秀楠衡柳の御所と申時、御庭山の由申し、此近里の大山也。裾野の川をさくら川と申、

夫より少し行、彼衣川有、此衣川の水上ニむかし安部(色)貞任の居城衣か館と申せし城跡ル今残るよし。其頃蒙勅八幡太郎義家公、奥州征伐在々し事ハ、大(太)平記ニ委し。右の衣か館と申は通り筋よりも余程北上也と承る。且前ニ申判官館と申ハ通道より少し東ノ方小山にて義経公の御像有之由。且又中尊寺等参詣の心さしも有之候得共、先方へ差急ニ付左右ニ見なし衣川の土橋を渡り瀬原といふ所を通る(後略)

(復路)翌十六日(前略)夫より衣川土橋を渡り中尊寺ニ参詣す。此所ハむかし秀衡公御菩提所と承る。当時坊数十八ヶ寺有之。夫々別当ニ立寄相頼候処、案内出。経堂ニ参詣す。御本尊ハ文殊菩薩、宝物ハ水火玉并ニ竜牙。是ハ手ニ取て見るに石かと覚えやり。乍然拵物ニあらず。其凶(省略)。如此ニ相見申候。其外ニは唐物蓮織の袈裟、実正不知。

但し右の御経と申ハ清衡公基衡公奉納、何れも紺地の紙へ金字にて書す。双方共ニ御自筆の由、秀衡公奉納ハ唐の宋朝の板と申。

夫より光堂ニいたる。此所ニ芭蕉翁碑 五月雨の降残してや光堂(図省略)此光堂と申ハ則清衡公より秀衡公迄御三代の御墓の由、此御堂柱ハ七宝を以巻候柱なりと申并戸其外共ニ布を着せ塗候様ニ候得共、最早数百年の義故大ニ破れ候。

夫より式三丁離れて愛宕社有、別当来て開扉す。右の脇ニ武蔵弁慶の像あり。具足着し烏帽子にて七ツ道具背ニ負、長刀を手ニ携ひ波上に立る。御身丈六尺(尺) 式分。腰の廻五尺八分有之由。外ニ笈式ツあり。是ハ亀井片岡両公の東国下向ノ刻負候笈の由申之。乍去あまり新敷相見疑敷覚候得共其辺の老人申様先年余程の名人の彫物師来て見之、是社前ク正物ニ候由申之。其義は此細工鎌倉彫と申其頃の彫ニ相違無之旨申候と申之。且又右別当申様、此外弁慶所持の長刀別所ニ有之旨申候得共、疑ひ起し不見之。右参ヶ所共ニ開扉老人一ヶ所錢拾三文宛差出し候。

夫より桜川ニ下り候処、尔今打続絶間なく雨降殊ニ七ツ半時ニも相成候

間、桜川馬宿笈（及）川屋龜次宅ニ泊ル。但シ今朝出立いたし候水澤より小
道三十里、此所農家同様にて雨中泊り難儀いたし候（中略）

翌十七日 昨日の通り尚以雨不止降候得共、旅行の事故ニ早速出立し判官
楯（籠）と申一名高館義經大明神社ニ参詣ス。是も中尊寺同様別当持の由、
乍然別所へハ余程隔候ニ付、籠の農家取扱の由ニ付、其宅ニ尋ね此段申相
頼ミ候処則案内し登て奉拜ニ小高山の頂に御社有。神前の額ニ白幡大明神
と有。開扉するに木像にて御像あり。年号尋るに天和年中建立之（中略）

十六 『東北遊日記』 吉田松陰

嘉永四年（1851）十二月、江戸千住を発し、東北漫遊を志し、水戸・白河・
会津より越後に出て、佐渡に渡り、転じて出羽へ入り、蝦夷地を雲烟の間
に望み、青森・盛岡・仙台・米沢に出て、日光を経て、嘉永五年（1852）
四月に江戸に帰るまでの日記。吉田松陰は長州藩士、江戸に出て佐久間象
山に洋学を学ぶ。後に萩に松下村塾を開き、多数の人材を育成したが、安
政の大獄（安政五・六年、1858・59）に連座し、1859年に刑死（国立国
会図書館近代デジタルライブラリーより）。

「嘉永五年三月 十四日。晴。発驛（黒澤尻）。舟渡和川（和賀川）・至鬼柳（現
北上市鬼柳町）。有関。南部封地疆于此。盛岡至鬼柳。左右有山。而山間
稍寛廣。蓋南部封内沃地此為最。至相去（現北上市相去町）。有仙台関。自
是以南。地形益寛廣。又舟渡一川（胆沢川）。至水沢（現奥州市水沢区）。伊達
將監采地也。祿一万五千石。至前沢（同前沢区）。三沢頼母采地也。祿三千石。
至中尊寺。離道入山五六丁。有十八坊。杉樹翳翳。頗有幽邃之致。寺藤原
氏所創也。曾聞之鎌倉僧。源羽林既滅藤原。見此寺宏麗。謂二衡時跋扈奥
州耳。尚且有此大伽藍。況吾為天下惣追捕使。安可無大造営乎。乃営二階
堂（後略）」

◆まとめ

一 既に周知されていた安部氏と奥州藤原氏関連史跡・伝承等

江戸時代に至るまでに、安倍氏・清原氏・奥州藤原氏、及び源義経に係る史実や伝承は、東北地方及び全国の文化人に周知されていたと思われる。最初に紹介した『盛岡紀行』に泰衡の錦戸・佐藤庄司と兄弟・衣川・高館・前九後三年合戦のことが見え、『曾良旅日記』にも佐藤庄司・伊達大木戸・高館・衣川・衣ノ関・中尊寺・光堂・泉城・さくら川・さくら山・秀平やしき・タツコクガ岩や・月山・白山・経堂・金雞山・シミン（新御堂）・无量劫院跡などがみえているからである。

その背景には、『吾妻鏡』ほかの歴史書、『陸奥話記』『奥州後三年記』『源平盛衰記録』ほかの物語類、そして幸若舞・謡曲・奥浄瑠璃などが広く流布していたことがあげられよう。これらの物語類については別稿を予定している。

また、歌枕や名所旧跡の知識については、松尾芭蕉の『おくのほそ道』の旅の後に成った『奥羽観蹟聞老志』（佐久間洞巖 1719）、『封内名蹟志』（佐藤信要 1741）・『封内風土記』（田辺希文 1772）、そして安永二九年（1773）80）に各村々より提出させた「風土記御用書出」などの地誌類が大きく影響したと思われる。歌枕の地の強引な比定などの疑いはあるが、これらが大きな影響力をもったのは否めない事実である。

二 特徴的な記述

紀行文等を見ると、様々な主題・項目についての記述があり、当時の歴史認識等を垣間見ることができる。また、一つの項目の記述に異同が存在することは、今後の検討課題に関連するものでもあり、極めて貴重である。以下にその一部を紹介する（書名は略記した）。

①奥浄瑠璃

* 『おくのほそ道』―奥上るり云々

* 『菅菰抄』―奥上るりは今俗の仙台浄瑠璃といふものにて云々

* 『かすむこまがた』―琵琶法師来りぬ。是も慶長のむかしより三線云々

* 『胤馬代金』―お国ぶしという浄瑠璃をきく事を得たり云々

②衣の関

* 『奥游日録』―衣關は里民指す所は高館に近し。關の可有所に非ず。恐

くは舊所を失せる也云々

* 『東遊記』―此山を関山という。麓の街道に昔関所ありて、衣が関と名

付く（中略）衣の里の関所ゆえ衣の関ともいう

* 『かすむこまがた』―（衣の関）その関の古跡は、鶉ノ木といふ地に

在り云々

* 『北行日記』―其れ（弁慶立往生の所）より巽六七丁北上川を東に渡り

て衣ノ關の跡有り、往古は北上川衣ノ關の東を流れて東山へ通ぜしよし

（中略）北上川の瀬移りて今は衣ノ關の西を流るゝの故に云々

③鳥海柵

* 『北行日記』―（鳥海村）西館と號し鳥海三郎宗任が館の跡云々

④比爪柵

* 『けふのせばの』―清衡の四男樋爪太郎俊衡入道の館の址は、五郎沼

のひんがし北に在といへば、処の名にもいふならん云々

* 『松前紀行』―ひづめむらといふ。樋爪太郎とし衡。同五郎秀（季）衡。

くりや川にまゐりしこと。ふるきふみにもみえたり。かれらが住みしと

ころにやあらん。五郎が墓もかしこにあるといへり云々

⑤琵琶柵

* 『けふのせばの』―みちの左に鳥屋崎の城といふ、これなん琵琶の柵

といひて、安陪頼時のつきそめ給ひし云々

『夢ノ城』―琵琶(芭) 柵ハ泉ノ城ナリ

⑥ 鶴脛柵

*『いわてのやま』―倉沢といふ村に出て、見やる高岨に松杉の生ひまじりたるは古館とて、鶴脛五郎家任のいにしへをしのぶ云々

⑦ 黒沢尻柵

*『けふのせばのの』―加志といふ処に、黒沢尻四郎政任のありしいにしへを偲ぶ云々

⑧ 小松が館・瀬原の柵

*『かすむこまがた』―此里の良の方に小松が館といふあり、そは阿部(安倍)ノ兄弟栖たる瀬原の柵ともいひし処といへり

⑨ 衣の館・衣川の城

*『盛岡紀行』―道路の左に高館山あり。是なんそのかみ衣川の館といへり

*『東遊雑記』―貞任・宗任の籠城して挑み戦いし衣の館・衣の柵と称せしは、今の中尊寺の山なるべし(中略) 清衡この所に館をうつし、衣の柵を以下で墳墓の地とし、寺院を建立せしものなるべし(中略) 衣川・衣の關の名によりて、衣の館とも称し云々

*『東遊記』―安倍貞任が籠りし衣川の城は此中尊寺よりは一二里ばかり山に入りてあり云々

*『筆満可勢』―此衣川の水上にむかし安部貞任の居城衣か館と申せし城跡今残るよし

*『北行日記』―貞任が衣の館は衣川の橋より川上小道十里斗西の方に小山になりてあり

⑩ 義経館・高館・判官館

*『奥游日録』―義経館の跡と云は小高き山上也。これを高館と云。後世

義経宮を建て有云々

*『菅菰抄』―高館は、義経籠居の城跡にて云々

*『かすむこまがた』―九郎判官の館の跡高館といへるあり云々

*『東遊雑記』―土人高館を判官館と称す(中略) 高館(土人は判官館というなり、奥州にては館をタチといえり)(中略) ある書に、高館は高館前民部大輔基成といひし人の旧館なり云々

*『北行日記』―義経堂の山を判官館といふ高館の城跡也と傳ふ

*『東遊記』―又義経の住み給いし高館は直に此関山の下にて、纔かに街道筋へだて中尊寺より五丁に近し。高館の跡は甚だ狭く纔かの所にて、中々当今の城郭杯のごとき跡とは見え、只暫時義経の住みし屋舗の跡といふべし

*『胤馬代金』―夫より名にしおふ高館麓を通り、此所ハいにしへ義経公主従共秀衡の城郭に住せし所といふ。此所を尔今判官館と申

⑪ 柳御所

*『奥游日録』―(高館の)その下を柳御處、清衡・基衡二代居所

*『かすむこまがた』―(鈴沢の池に續けて) 柳の御所は、清衡、基衡の館の跡にして、其むかし江刺ノ郡豊田ノ館をうつされて、豊田ノ御所とも云ひしとなむ

*『東遊雑記』―(高館に續けて) 柳御所。加羅楽の御所と称する所、平地にして松林あり

*『北行日記』―(義経堂より) 南三丁斗り柳の御所とて田畑となりて有り、秀衡の館の跡と傳ふ

⑫ 平泉の支配領域

*『北行日記』―秀衡城廓北は折井南は清水の大門東は東山の内なる千馬屋西は達谷を限りとすと土俗傳ふ(中略)(旧西磐井郡花泉町金沢にて) 右の方清水の大門の跡秀衡の門の跡と傳ふ、今は金澤の内となる。同じく右

に二王門原とてあり、秀衡の時に二王の立ちたる所よ傳ふ（後略）

⑬ 三衡の官職・位階

* 『かすむこまがた』— 鎮守府ノ將軍陸奥ノ守奥羽兩州ノ押領使從四位上少將藤原ノ朝臣秀衡入道

* 『東遊雜記』— 藤原清衡、鎮守府將軍となりて、基衡・秀衡父子三代の真に堂坊舎を建立せしもの

* 『東遊記』— 秀衡、鎮守府將軍たりし時（中略）奥羽二州の大守、鎮守府將軍秀衡父祖三代居住の古城跡（中略）鎮守府將軍藤原清衡中興なり。

清衡は秀衡の父祖にして、此時既に奥羽二州の大守

* 墓碑銘— 前鎮守府將軍基衡『奥游日録』『かすむこまがた統』

⑭ 年号・年代・年忌

* 和泉三郎の燈籠— ▲文治三年— 『おくのほそ道』『菅菰抄』『北行日記』
▲文治年中— 『胤馬代金』

* 基衡室墓碑— ▲仁平四年— 『奥游日録』▲仁平二年— 『かすむこまがた統』

* 釣鐘紀年銘— ▲康永二年— 『奥游日録』『かすむこまがた』『東遊雜記』

* 中尊寺創建— ▲長治二年（釣鐘銘）— 『奥游日録』▲嘉祥三年— 『かすむこまがた』

* 中尊寺回祿— ▲建武四年— 『奥游日六』▲建武二年— 『かすむこまがた』

* 金色堂創建— ▲天仁二年— 『かすむこまがた』『東遊雜記』

* 覆堂建立— ▲正応元年— 『東遊記』

* 毛越寺回祿— 元龜三年— 『かすむこまがた』

* 義経五百回忌？— 『曾良本・おくのほそ道』五月雨や年、降て五百たひ

* 秀衡六百回忌— 『ゆきのいさわべ』秀衡のあそ六百年のいみにあたり給

ふ

* 清衡没年— 大治元年七月十七日『かすむこまがた』『東遊雜記』『東遊記』

* 基衡没年— 保元二年三月十九日『かすむこまがた』『東遊記』

* 秀衡没年— 文治三年十二月廿八日『かすむこまがた』『東遊雜記』『東遊記』

* 堂内壇— ▲中壇清衡『奥游日録』『かすむこまがた』『東遊雜記』『東遊記』

▲左壇基衡『奥游日録』『かすむこまがた』『東遊記』

▲右壇秀衡・忠衡『奥游日録』『かすむこまがた』『東遊雜記』『東遊記』

* 納経— 『奥游日録』清衡紺紙金泥、基衡紺紙金銀字、秀衡宋板

『かすむこまがた』清衡金銀泥 天仁元年 基衡紺紙金字 秀衡宋板

『東遊記』清衡金銀泥 基衡紺紙金字 秀衡宋板

『松前紀行』清衡・基衡紺紙金字 秀衡宋板

* 秀衡兄弟三人の尊骸— 『筆満可勢』

* 鎌倉幕府への影響— 『東北遊日記』源羽林既滅藤原。見此寺宏麗。謂二

衡時跋扈奥州耳。尚且有此大伽藍。況吾鳴為天下惣追捕使。安可無大造

堂乎。乃營二階堂。

⑮ 義経生存伝説

* 『かすむこまがた』— 『清悦物語』「上編義経蝦夷軍談」

三 安永四年（1775）書出との比較

参考までに、以上に係る事柄の一部について各書出の記述と比較する

（『宮城縣史27 資料篇5 風土記 西磐井郡・東磐井郡・気仙郡』1959（財）

宮城縣史刊行会発行より）。

① 「明治五年（1872）磐井郡西磐井平泉村風土記御用書出（前略）」

一 古館 三ヶ所

一 高館 東西四百六拾六間南北百三十間 往古ハ民部少輔基成御住居ノ由ニ

候處

文治年中源義経公御居館卜申傳候事（中略）

一 古碑 三ツ

一石碑 安部(倍)ノ宗任女碑 右碑面前鎮守府將軍藤原基衡安部宗任女仁

平申年四月二十有日と切付有り(後略)

②「安永四年(1775) 岩井郡西磐井平泉村天台宗醫王山金剛王院毛越寺書出

一故事來歴之事 當寺は前書之通人皇五十四代 仁明天皇嘉祥三年

(850) 慈覺大師草創二而(中略) 星霜漸移て諸社堂宇破壊に及べり

爰に長治年中 堀川院皇子 鳥羽帝御惱にましませし時、上皇是を悲

しみ轉師を召して鑑文を捧しむ轉師詳に奏聞し即御祈願有て御惱平癒

し後再興の勅語ありて、鳥羽院の御宇左少辨富任朝臣 勅使として御

下向あり前の官領主に命して諸社堂宇悉再興有富任奉行し給ひ官領主

清衡基衡 勅命を蒙りて造立せり(中略)

一平泉四代ノ正忌日之事

一清 衡 大治元年(1126) 七月十七日

一基 衡 保元二年(1157) 三月十九日

一秀 衡 文治四年(1188) 十二月廿八日

一泰 衡 文治五年(1189) 九月三日

右ハ一山僧侶會合仕毎年證供之法式相勸申候事

一毛越寺伽藍再興之事

勅詔ハ堀川院御宇長治二年(1105) 春二候由申傳候事

一圓隆寺嘉祥寺燒失之事

一正慶四年(1335) 坊舎共に燒亡仕候由申傳候事

一大阿彌陀堂燒失之事

一元龜三年(1572) 三月八日當山堂塔燒失仕候事(中略)

一古キ墓所之事

一前鎮守府將軍基衡室安部(倍) 宗任女墓 一基

右二仁平二壬申年(1152) 四月廿日と有之候當安永四年迄六百十九年罷成申候毎年當日には一山會合仕靈供之法式修行仕候世俗平泉の泣祭と申傳置候事(中略)

一境内景地之事(前略)

金けい山の東

金けい山巽

一柳之御所 八丁七間丑ノ九分 一伽羅ノ御所 七丁廿八間寅ノ六分(後略)

③「安永四年 磐井郡西磐井中尊寺村天台宗關山中尊寺弘台壽院書出

一開山之事

當山ハ人皇五十四代 仁明天皇御宇嘉祥三年(850) 慈覺大師開山(中

略)

一故事來歴之事

當山ハ慈覺大師範之開基二而(中略) 然所開山自數百年を経て既に頽

廢に可相及之處清衡志願ニ依て輪奐を復し人皇七十三代 堀川院人皇

七十四代鳥羽院兩帝之勸聽に達し天治三年(1126) 三月廿四日干支

相應之吉辰ニ付勅使として按察使中納言顯隆御下向御供養有之(中

略)

一別當所之事(前略)

一金色院 別當 金色院

右堂天仁二年(1109) 清衡建立ニ而當安永四年迄六百六拾七年

ニ罷成堂内三段ニ相構候内右段下縁之上中段ニ清衡左段基衡右段

秀衡平泉三代之遺骸を佛壇ノ下縁ノ上ニ相納右何茂嚴然として棺

中に存在仕候得共不得披事深ク隱置申候事但右段之側ニ和泉三郎

首桶納置申候事(中略)

④「安永四年 磐井郡流金澤村風土記御用書出(前略)

一舊跡 貳ツ(中略)

地藏堂北

一大門跡 往古鎮守府將軍藤原秀衡公當郡西岩井平泉村高館御居館之
大門相立候所と申傳候事（後略）

四 若干のコメント

①衣の関の位置

『かすむこまがた』は鶴ノ木（旧胆沢郡前沢町鶴木）説、『北行日記』は北上河東説を紹介している。

②鳥海柵の位置について

この柵は古くから胆沢郡西根村に比定されてきたが『北行日記』は東磐井郡鳥海村（旧大東町）説を紹介している。

③比爪館の位置

『けふのせばのの』は「五郎沼のひんがし北に在り」と記しているが、これは現在承認されている赤石小学校周辺とは異なる位置を意味するものであり、具体的にはどこであろうか。

④衣の館・衣の柵

『東遊雑記』は「衣の館・衣の柵は中尊寺の山なるべし」としているが、その他はやや上流部としている。

⑤高館・判官館・義経館

諸紀行とも、いずれも同一の場所としているが、『吾妻鏡』に見える藤原基成居住の「衣河館」へ言及した例はない。

⑥金色堂の建立年代

『かすむこまがた』『東遊雑記』は「天仁二年（1109）」としているが、金色堂棟木への墨書銘は「天治元年（1124）」である。

⑦歴史的な四衡の没年

▲清衡 大治三年（1128）七月十七日

▲基衡 保元二或いは三年（1157か58）三月十九日

▲秀衡 文治三年（1187）十月二十九日

▲泰衡 文治五年（1189）九月三日 である。

⑧金色堂内3棺の位置関係

諸紀行文は左壇基衡、右壇秀衡（忠衡首級）としている。佐々木邦磨氏によると「中央壇の中に清衡の遺体が納められ、後に右壇（向かって左側）・左壇と増設して、それぞれ基衡・秀衡及び泰衡の首級と、父子四代の遺骸を納める。1950年の学術調査の結果、基衡と秀衡の遺体が入れ替わっていること、忠衡とされた首級は泰衡であることなどが判明。血液型も鑑定され、清衡A B・基衡A・秀衡A B・泰衡B型と判明した」という（『岩手百科事典』1978 岩手放送発行より）。なお、左壇を西北壇、右壇を西南壇と呼ぶこともある。

⑨平泉文化の広がり

『北行日記』に「頼朝が平泉を真似て二階堂を建立した」とあるが、これは頼朝が、平泉大長寿院二階大堂を模して鎌倉永福寺を建立したことを意味しており、諸紀行文の中で唯一、平泉文化の後世への影響に触れたものということができ、吉田松陰の卓見というべきである。

⑩『おくのほそ道』の旅の目的

松尾芭蕉が『おくのほそ道』の旅に出た元禄二年（1689）が義経の没後500年に当たること（ちなみに西行の没後499年目でもある）、『曾良本・おくのほそ道』に記載された「五月雨の降のこしてや光堂」に決定される以前の句（最初の作句）が「五月雨や年く降て五百たひ」であったこと、平泉が最終到達目的地であったこと、平泉より先の日本海側を辿った旅のルートが『義経記』の義経都落ちのルートを逆に辿っていること、等々の理由から、芭蕉のこの旅は義経の五百回忌を弔う意図があったのではないかと指摘があるが、極めて魅力的である（工藤雅樹『平泉への道―国府多賀城・胆沢鎮守府・平泉藤原氏』2005 雄山閣出版発行）。

以上、管見に触れた近世の紀行文を概観した。その結果、江戸時代には、安倍氏と奥州藤原氏、そして義経に係るイメージが既に出来上がっていたことが窺われた。従って、今後はその基礎となった中世の物語・幸若舞・謡曲・御国浄瑠璃などの整理が必要である。

又、紀行文の記述内容の多くは地元民よりの聞き書きによるものである。うから、地元の伝承などが盛り込まれた地誌類の検討も必要である。

さらに、菅江真澄が『清悦物語』ほかの義経生存説に係る文献にも触れており、それらの整理も行いたい。義経北行伝説が形成される背景は、重要な研究テーマである。

(平成25年11月7日 稿了)

※岩手大学平泉文化研究センター客員教授